御所市文化財調査報告書　第 53 集

奈良県御所（ごせ）市

朝　妻　廃　寺

－第 4 次発掘調査報告－

平成 29 年（2017 年）3 月
御 所 市 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は、御所市道建設工事に伴う事前調査として、御所市副市長（担当：御所市土木課）の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市朝妻 450 番 5 ほかに所在する朝妻廃寺の発掘調査報告書である。

2　調査の体制等は次の通りである。

　調査主体　御所市教育委員会　　調査担当　御所市教育委員会
　　文化財課技術職員　金澤雄太

　調査期間　平成 28 年 8 月 1 日～ 10 月 28 日　調査面積　411㎡

3　現地での写真撮影、および遺物の撮影は金澤が行った。

4　本書の編集・執筆は金澤が行った。

5　発掘調査には、調査補助員として芦塚晶太、金光順子、松村朋美の協力が、遺物整理・報告書作成には、芦塚、金光、松村に加え、津谷晴美の協力があった。

6　本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会文化財課にて保管している。

7　土器実測図の断面は、須恵器を黒塗りとし、土師器ほかを白抜きとした。

8　本書における座標は世界測地系に基づき、標高は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。

9　本書における壁面の呼称は、現地調査時のものを踏襲し、北東壁を北壁、北西壁を西壁、南西壁を南壁、南東壁を東壁としている。

目　　次

例言
第１章　位置と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３章　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第４章　各トレンチの調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第５章　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第６章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
参考文献
図版

挿図　目次

図１　朝妻廃寺の位置・・・

図版４　１　４トレンチ全景３（東から）
　　２　同全景４（南から）
図版５　１　４トレンチ下層遺構面全景（東から）
　　２　同下層礫溜り（東から）
図版６　１　４トレンチ南壁土層断面
　　２　同西壁土層断面（南側）
　　３　同西壁土層断面（中央）
　　４　同西壁土層断面（北側）
図版７　１　４トレンチ土坑１（北東から）
　　２　同ピット１（北東から）
　　３　同ピット２（東から）
　　４　同ピット３（西から）
　　５　同ピット４（南西から）
　　６　同ピット５（北東から）
　　７　同ピット６（西から）
　　８　同ピット７（東から）
図版８　１　４トレンチピット８（東から）
　　２　同ピット９（東から）
　　３　同ピット 10（東から）
　　４　同ピット 11（東から）
　　５　同ピット 12（東から）
　　６　４トレンチ出土礎石
図版９　１　５トレンチ掘削前（北東から）
　　２　同全景（北東から）
　　３　同南壁土層断面
図版 10　１　５トレンチ中央部南壁土層断面
　　２　同北端下層確認（南西から）
　　３　同南端下層確認（北から）
図版 11　１　３トレンチ出土土器
　　２　４トレンチ出土土器
　　３　５トレンチ出土土器
図版 12　４トレンチ出土瓦１
図版 13　４トレンチ出土瓦２

第１章　位置と周辺の遺跡

（１）位置（図１）

御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58km^2 の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛・葛城山がそびえ、南東部には竜門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がはしる、内帯と外帯の接する地域といえ、自然景のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

今回調査を行った朝妻廃寺は、奈良盆地の南西端、金剛山東麓の標高 250 m付近に位置する。南の深谷川と北の南太田川に挟まれた緩傾斜地の南寄りにあり、深谷川との間にはさらに伏見川によって形成された谷地形が存在し、朝妻廃寺の南側に迫っている。

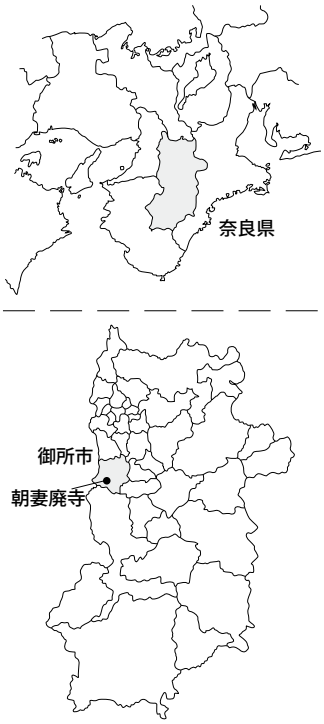


図１　朝妻廃寺の位置

（２）周辺の遺跡（図２）

御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。明確な遺構が確認されている遺跡はそれほど多くないが、観音寺本馬遺跡において後期の竪穴式住居や土壙墓、晩期の平地式住居や水場遺構、土器棺墓群（本村 2009、岡田編 2013、木許・西村編 2015）、玉手遺跡において晩期の平地式住居や土器棺墓群が検出されており（木許・小泉・村島編 2017）、近接する橿原市曲川遺跡なども含めて具体的な集落の様相について議論できる下地が整ってきている。またこれら遺跡では、前者で半裁柱、後者で漆塗糸玉といった北陸地域でみられる遺構・遺物が多く確認されており、当時の交流の一端が窺われる。加えて、伏見遺跡では中期末～後期中葉（廣岡・十文字 2005）、南郷遺跡地蔵谷地区では中期末～後期初頭の土器が多く出土しており（坂編 2000）、付近に集落の存在が想定できる。縄文時代の遺物の出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期～晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている（松田 1997）。

弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営ま

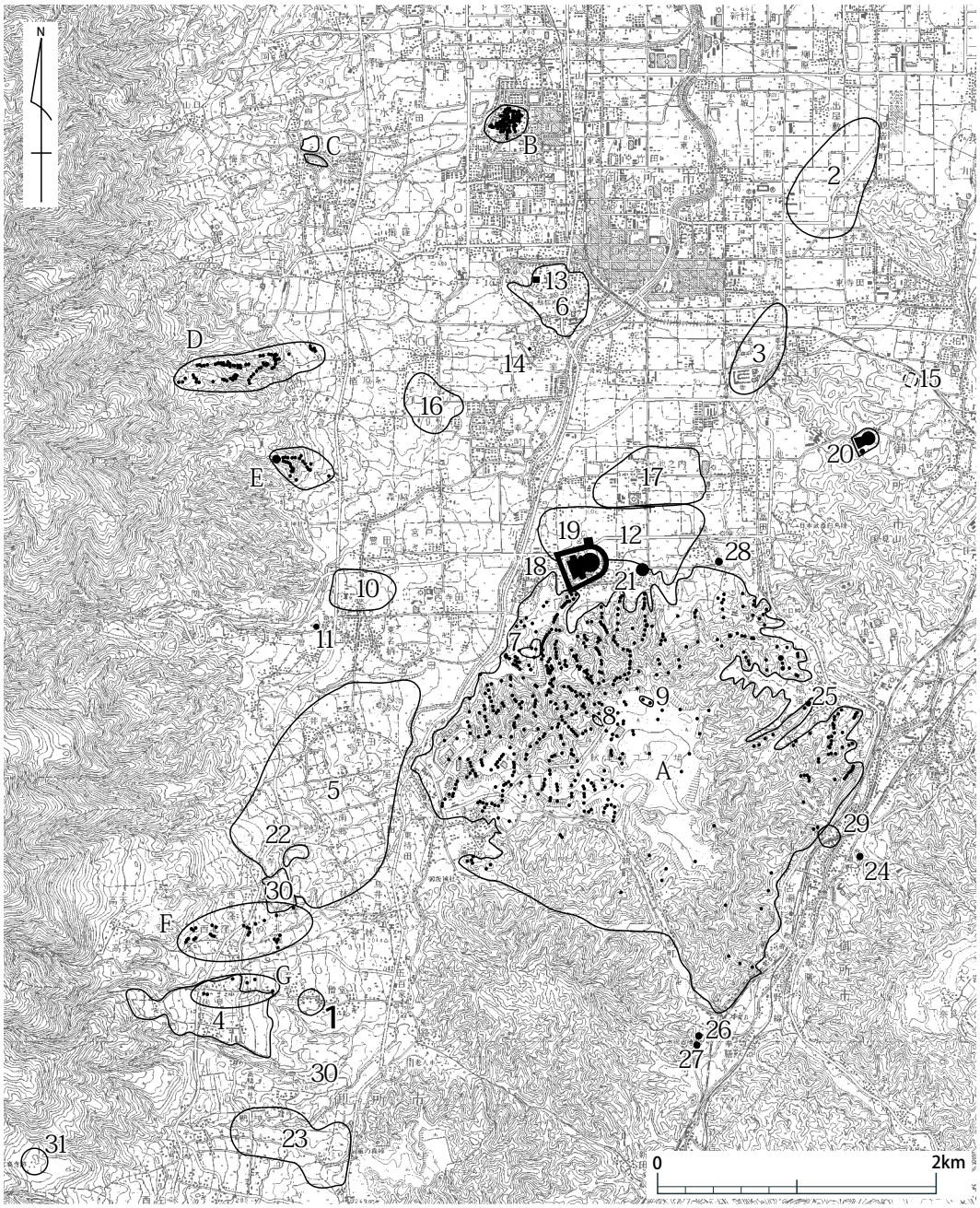
れた拠点的大集落と考えられる（木許編 1992、藤田・尼子編 1992 ほか）。高地性集落では、巨勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡（藤田編 1985、木許編 2007 ほか）、巨勢山中谷遺跡（御所市教育委員会 1989）、巨勢山八伏遺跡（御所市教育委員会 1990）などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡よりやや南西のところでは外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡が発見されており、青銅器埋納地として古くから著名である（高橋 1919）。近年の発掘調査では、観音寺本馬遺跡において方形周溝墓群が検出され墓域の様相が（鈴木編 2014）、秋津・中西遺跡において広大な水田遺構や埋没林が検出され生産域の様相が、それぞれ明らかとなっている（松岡 2011、岡田・松岡 2012、本村・中野 2013、岡田・絹畠・中東 2013、岡田・中野 2015、岡田・木村 2015、絹畠 2015）。後者については、全国でも最大規模のものであり、秋津・中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

古墳時代に入ると、前期では鴨都波 1 号墳が著名である（藤田・木許編 2001）。一辺約 20 mの小規模な方墳ながら、 4 面の三角縁神獣鏡や方形板革綴短甲、漆塗鞍といった豊富な副葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となろう。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり、鴨都波 1 号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、楢原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田編 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津・中西遺跡から前期前半の方形区画施設や独立棟持柱をもつものを含む多数の掘立柱建物、竪穴式住居が検出され（米川・菊井 2010、岡田 2011、岡田・松岡 2012、岡田・中野 2015）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出される（佐々木 2012）など、重要な成果があがってきている。

中期になると、突如として墳長 238 mを誇る大前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許編 1996、藤田・木許編 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢をもち（梅原 1922、関川 1989）、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長 149 mの前方後円墳である掖上鑵子塚古墳が築造されるが（楠元編 1978 ほか）、その立地が曽我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約 50 mの円墳であるみやす塚古墳も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である（網干 1959）。

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡が特筆されよう（坂編 1996 ほか）。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土



1. 朝妻廃寺　2. 観音寺本馬遺跡　3. 玉手遺跡　4. 伏見遺跡　5. 南郷遺跡　6. 鴨都波遺跡　7. 巨勢山境谷遺跡
8. 巨勢山中谷遺跡　9. 巨勢山八伏遺跡　10. 名柄遺跡　11. 名柄銅鐸・銅鏡出土地　12. 中西遺跡　13. 鴨都波 1 号墳
14. 西浦古墳　15. オサカケ古墳　16. 楢原遺跡　17. 秋津遺跡　18. 室宮山古墳　19. ネコ塚古墳　20. 掖上鑵子塚古墳
21. みやす塚古墳　22. 極楽寺ヒビキ遺跡　23. 鴨神遺跡　24. 権現堂古墳　25. 新宮山古墳　26. 水泥北古墳　27. 水泥南古墳
28. 條ウル神古墳　29. 巨勢寺　30. 二光寺廃寺　31. 高宮廃寺跡
A．巨勢山古墳群　B．石光山古墳群　C．小林古墳群　D．石川古墳群　E．吐田平古墳群　F．北窪古墳群
G．ドンド垣内古墳群

図２　周辺の主要遺跡分布図

した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され、古墳の被葬者と集落との関係を考える上でこの上ない成果といえる（北中編 2007）。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構が（藤田 1991）、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構が確認されている（近江編 1993）。

後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、樋野権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教育委員会 1980 ほか）、水泥北古墳、水泥南古墳（網干 1961b ほか）があげられ、高取町域の市尾墓山古墳、市尾宮塚古墳なども含めて巨勢氏との関連が考えられる。地理的にはやや離れるが、巨大な横穴式石室をもつ條ウル神古墳についても、近年の調査で墳長 70 m前後の前方後円墳であることが確実視できるようになった。石室の型式が巨勢谷のものと類似しており、その破格の規模とともに注目される（御所市教育委員会編 2003、金澤 2015）。

群集墳に関しては、総数 800 基を超える巨勢山古墳群（藤田編 1987）や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群（河上ほか編 1976）、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群（藤田 1987）や石川古墳群（白石 1974）、吐田平古墳群（網干 1961a）、金剛山の東側斜面尾根上に位置する北窪古墳群（末永 1932、廣岡 2002 ほか）やドンド垣内古墳群（十文字編 2007 ほか）などが存在する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に築造が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、金剛・葛城山東麓部は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられ、それらの築造主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴式住居などの遺構が確認できており、集落が継続して存在していることがわかる（藤田・尼子編 1992、阪本編 2002 ほか）。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺に限られるが（河上・木下編 2004）、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺（廣岡 2006）では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の塼仏や瓦が出土し、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺（前園ほか 1978）、高宮廃寺（松田ほか 1993）の瓦と同笵のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

第２章　既往の調査（図３）

朝妻廃寺は、明治初期の頃、現地に土壇や数石の礎石が残存していたようで、後で述べる２次調査地において、塔の心礎が掘り出されたと伝えられていた。その塔心礎については、近隣の民家に移された後、さらに他所へ移されたようで、現在その正確な所在地は明らかでない。

朝妻廃寺での発掘調査は、これまで３次に渡って行われている。

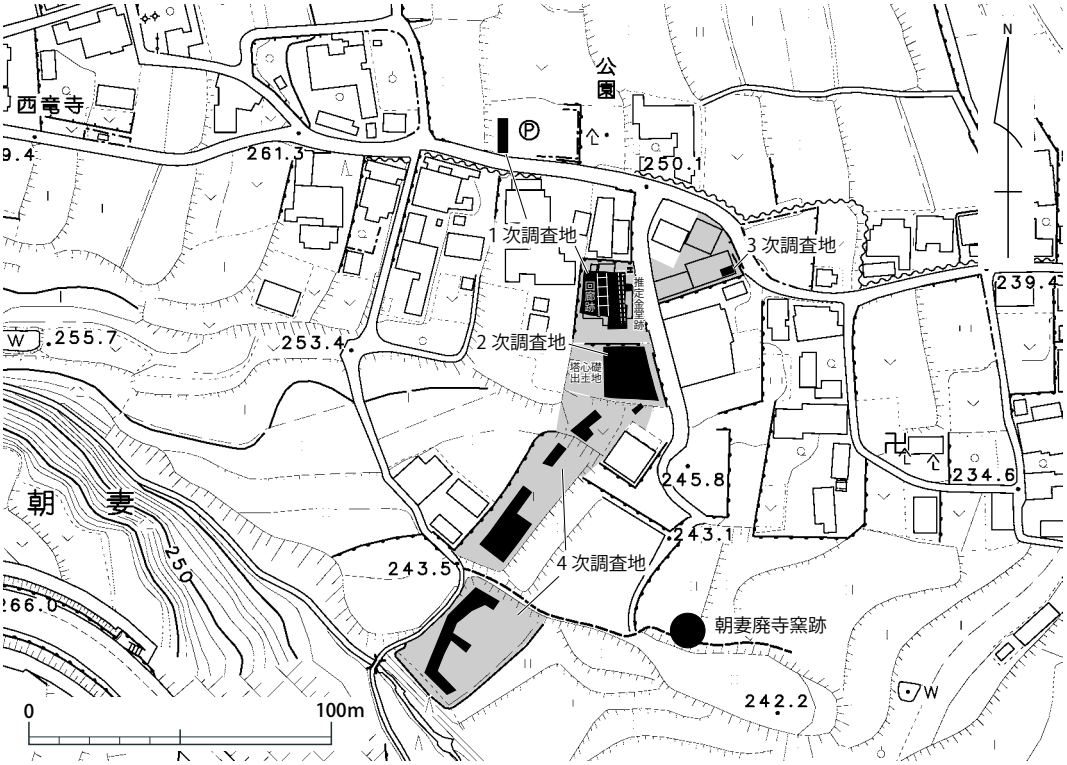


図３　既往の調査地

１次調査（前園ほか 1978）は、昭和 52 年７月～ 10 月にかけて、宅地開発に伴う事前の範囲確認調査として、奈良県立橿原考古学研究所が実施したものである。調査の結果、金堂と思われる基壇跡とそれに並行する回廊跡が検出され、その規模や周辺地形、小字名などから東面する法隆寺式伽藍が想定されている。出土遺物としては、複数種類の瓦が出土しているが、概ね７世紀後半～８世紀中葉頃のものであった。

朝妻廃寺については、文献上で平安時代頃の記述が認められるが、１次調査においては当該期の顕著な遺構や遺物はなく、その頃の実態については詳らかにはなっていない。また、文献に現れる朝妻造の存在から、渡来系氏族の氏寺としての性格が想定されている。創建瓦の様相は、和歌山県かつらぎ町に所在する佐野廃寺に類似しているようで、紀ノ川流域との強い関係が窺える。

２次調査（前園 1981）は､昭和 54 年３月～５月にかけて､１次調査に続く範囲確認調査として、奈良県立橿原考古学研究所が実施した。１次調査地の南側隣接地にあたり、先述の塔心礎が掘り出された位置にあたる。調査の結果、１次調査成果と連続する瓦群を調査区北部の一部で検出したものの、南側は後世に大きく攪乱されていることが明らかとなり、塔に関する情報を得ることはできなかった。中世の土坑からは、塼仏や押出仏と思われる金銅板片などが出土している。

また２次調査中、調査区の南 80 m程のところで行われていた水田石垣の改修作業中に、瓦窯が確認された。採集された瓦は、朝妻廃寺の第Ⅱ期の回廊所用瓦と同種のものであり、創建の次の段

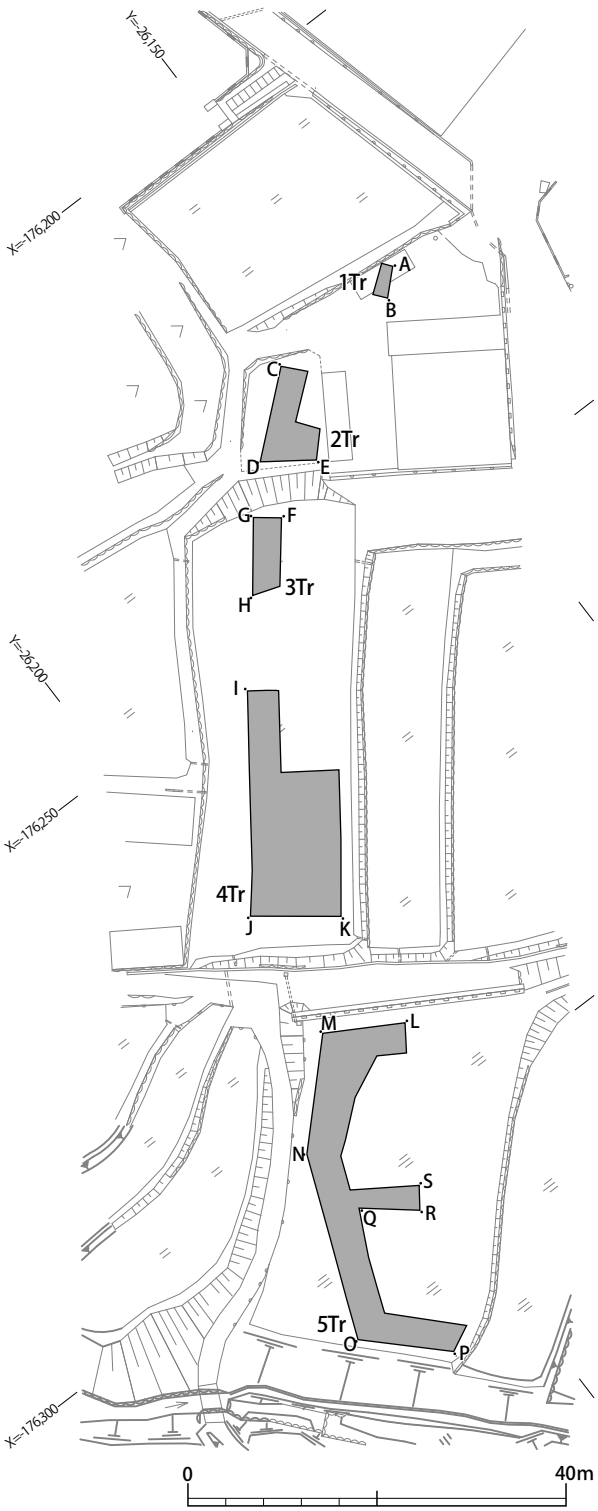


図４　トレンチ配置図

階における隣地生産を窺わせるものといえる。

３次調査は、平成 26 年３月に、個人住宅の建築に伴って御所市教育委員会が実施したものである。狭小な面積での調査でもあり明確な遺構は検出されなかったが、より上位からの流入土と思われる土層から、奈良時代と思われる土師器や布目をもつ平瓦が出土している。

第３章　調査の経過

（１）調査にいたる経緯

本発掘調査の契機は、平成 28 年５月 19 日、御所市長　東川裕氏から、御所市朝妻 450 番５ほか５筆における市道建設を目的とする発掘通知（第 94 条第１項）が提出されたことによる。当該地は朝妻廃寺（奈良県遺跡地図「16 － D － 28」）の範囲内及び隣接地に相当していた。

道路建設という内容から、当市教育委員会は、施工前の発掘調査が必要との意見書を付して、提出された発掘通知を平成 28 年５月 23 日付で奈良県教育委員会に進達した。対して、奈良県教育委員会から平成 28 年６月 16 日付で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」があった。当市教育委員会からの「発掘調査の通知」は平成 28 年７月 27 日付で提出した。

現地での発掘調査は平成 28 年８月１日～ 10 月 28 日の間に行い、実働日数は 46 日である。

（２）発掘作業の経過

市道建設予定地は、北東から南西への傾斜地に営まれた棚田となっており、大きく上段・中段・下段の３段となっている。上段は２次調査地と隣接し、上述の調査成果から、一定の撹乱が生じていることが予想された。また、上段と中段の間には約 3.0 m、中段と下段の間には約 4.4 mもの比高差があり、中世以降の土地改変も相当に行われていることが考えられたため、現況地形から朝妻廃寺に伴う遺構の存否を推測することは至難であった。そのため、当初からの全面発掘は避け、各段について試掘トレンチを設定し、適宜拡張していく方針で、調査を行うこととした。その結果、上段・中段に各２ヵ所、下段に１ヵ所の計５ヵ所のトレンチを設定することとなった。北側から順に１～５トレンチと呼称する（図４）。

掘削は重機と人力を併用して行い、層理面での遺構検出に努めるとともに、検出した遺構や土層の堆積状況について適宜写真・図面による記録を作成した。

以上のような経過をたどり、10 月 28 日に現地での調査を全て終え、機材等の撤収を行った。

（３）整理作業の経過

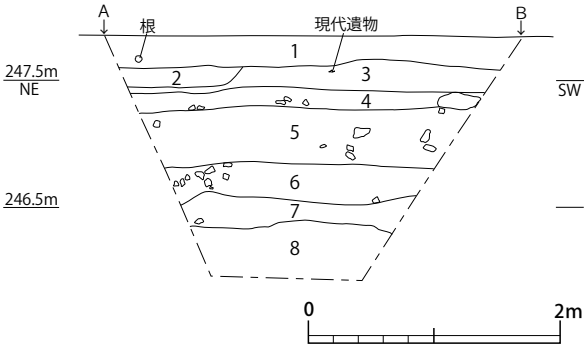
調査終了後、直ちに報告書作成に向けての整理作業を開始した。出土遺物は細片がその多くを占めたが、若干でも器種等の情報を引き出せたものに関しては可能なかぎり図化の対象とした。

報告書の作成には各種ソフトウェアを使用し、遺構･遺物についてはデジタルトレースを行った。

第４章　各トレンチの調査成果

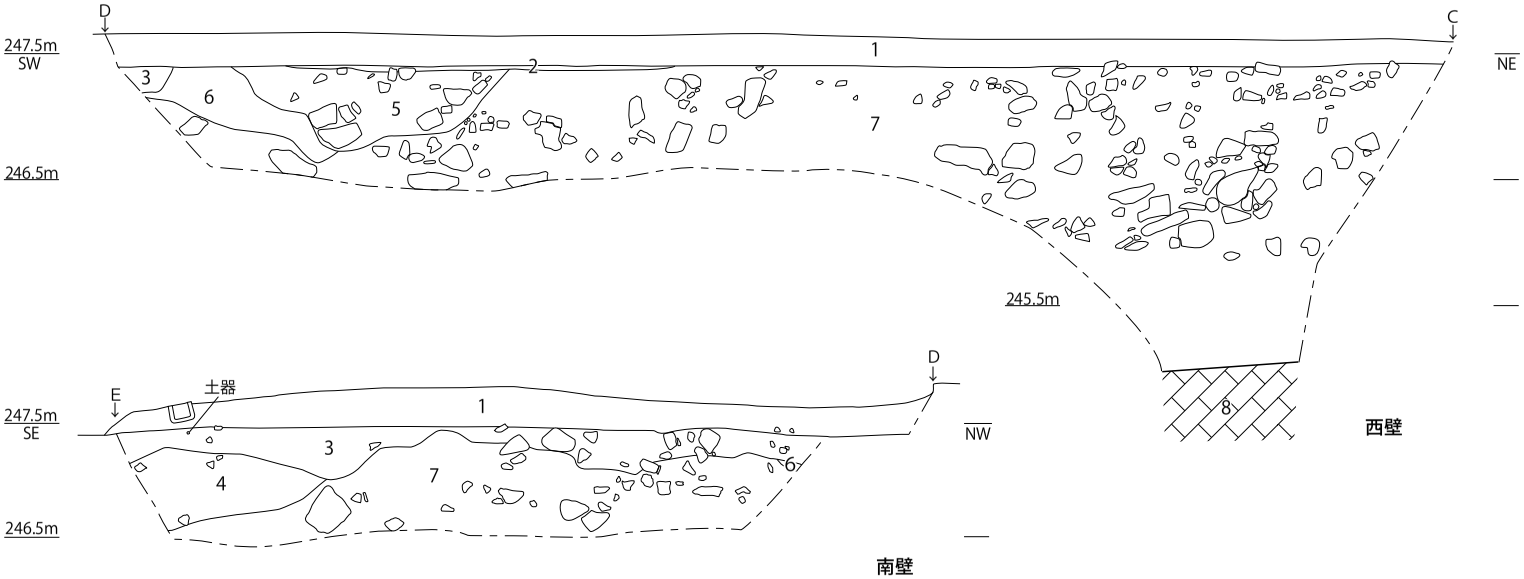
（１）１トレンチ（図５）

上段の北東端に 3.5 × 1.5 mの大きさで設定した。地表下約 1.9 mの深さまで掘削を行った結果、最上層には砕石の混じる現代盛土（１層）があり、その下層に旧耕作土と思われる堆積土が 20cm 程度の厚みで続く（２・３層)。さらに下層には、中礫や一部大礫を含む細砂～シルトの層、流水を思わせる中砂の層（４～８層）が認められた。いずれの層からも遺物の出土はなく、４～８層については、後述する他のトレンチ同様、谷地形における土石流堆積の累積と考えられる。



１．２・３層と砕石の混じる層（北端部のみ地盤改良がなされている）
２．オリーブ黒色（7.5Y3/1）粗砂質極細砂（5 ～ 10mm の礫を 2%含む、改良材の影響を受けた旧耕作土か）
３．黄灰色（2.5Y4/1）粗砂質極細砂（5 ～ 10mm の礫を 2%含む、旧耕作土）
４．にぶい黄褐色（10YR4/3）粗砂質シルト（5cm 前後の礫を 1%含む）
５．暗褐色(10YR3/3)中砂質シルト(5～10mm の礫を3%､10cm前後の礫を2%含む)
６．黄褐色（2.5Y5/4）中砂質細砂（5mm 以下の礫を 2%､5 ～ 10cm の礫を 2%含む）
７．黄褐色（2.5Y5/4）粗砂質細砂（5 ～ 15mm の礫を帯状に 3%含む、酸化鉄を一部帯状に含む）
８．黄褐色（2.5Y5/4）中砂（2 ～ 5mm の礫を 1%未満含む、酸化鉄を粒状に含む）

図５　１トレンチ東壁土層断面図



1．暗灰黄色（2.5Y4/2）中砂質極細砂（5 ～ 15mm の礫を 2%含む、耕作土）
2．オリーブ褐色（2.5Y4/3）極粗砂質極細砂
3．褐色（10YR4/4）粗砂質細砂（5 ～ 10cm 前後の礫を 1%含む、25cm の花崗岩風化礫を西半に数点含む）
4．黄褐色（2.5Y5/4）粗砂質細砂（10cm 弱の礫を 1%含む）
5．黄褐色（10YR5/6）粗砂質中砂（10 ～ 40cm の花崗岩風化礫を 30%強含む）
6．黄褐色（2.5Y5/3）極細砂（オリーブ褐色シルトブロックを 1%含む、分級構造が認められる）
7．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中砂質細砂（20cm 前後の礫を 2%、10cm 前後の礫を 3%含む、角のとれた花崗岩風化礫が多い）
8．地山

図6　2トレンチ西・南壁土層断面図

（２）２トレンチ（図６）

上段の南西部に長辺 10.6 m、短辺７m、幅約３mのＬ字形のトレンチを設定した。掘削の結果、現耕作土（１層）・床土（２層）の下で、大礫を多く含む（極）細砂層や、大礫や一部巨礫を含む中砂層（３～７層）が切りあいながら分厚く堆積しており、１トレンチ同様、谷地形における土石流堆積の累積と考えられる。

トレンチ北東隅で７層より下層の土層を確認するため、標高約 245 mあたりまで掘削を行ったところ、北東から南西へ傾斜する花崗岩の地山が確認できた。

いずれの層からも遺物の出土は認められなかった。

（３）３トレンチ（図７）

中段の北東端に 8.1 × 2.9 mの大きさで設定した。このトレンチにおいても、堆積の状況は１・２トレンチと大きく変らず､現耕作土(１層)の下に中礫から大礫を含む褐色系の極細砂やシルト層、大礫を多く含む中砂層が認められる(５～16 層)。これらの層は下層ほど礫を含む割合が高くなり、所々で分級構造の認められる層もある。現耕作土やその直下の土層（４層）には土師器や須恵器といった遺物が含まれるものの、大半の土層には遺物が含まれていない。そのため、それぞれの土層

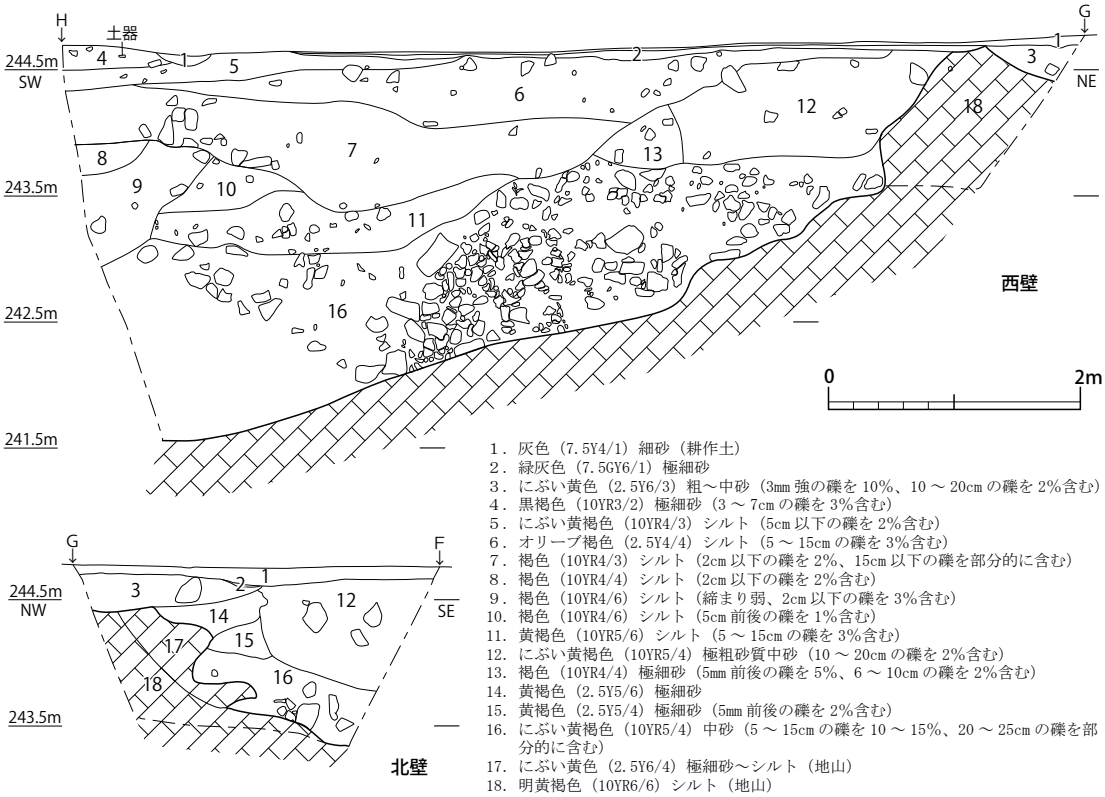


図７　３トレンチ西・北壁土層断面図

の性格を明確に峻別することは困難であるが、より下層のものは概ね谷地形に流れ込んだ土石流堆積と評価でき、上層の中にに後世の盛土が含まれている可能性も考えられよう。

３トレンチにおける地山の様相は、流水層により大きく抉られている部分がありながらも、概ね北東から南西へ傾斜している様子が確認できた。しかし、トレンチの南西端に至ると、地山の傾斜が緩やかとなりほぼ平坦となっていた。後述する４トレンチの成果も踏まえると、中段の北半部はもともと谷地形を呈しており、それが自然に埋没し、また人為的に埋められていく中で、現在のような１つの広い平坦面が形成されたと考えられる。

（４）４トレンチ（図８～ 12）

中段の南半に、長辺 15 m、短辺 9.7 mのトレンチを設定し、北隅部のみ長さ 9.0 m、幅約 3.0 mで北東方向に拡張している。

現耕作土（１層）、床土（２層）の下には、大礫を中心に 40cm 前後までの礫を多量に含む、70cm 程度の厚みをもつ９層が広く堆積している。この土層はその堆積範囲の広さから土石流などの自然堆積の可能性が考えられるが、その土層の上に南東方向へ向けて中～大礫混じりの土砂を重ねていくことで（３～８層）、旧耕作面から現在の高さまで地上げが行われたようである。（図８）

上記土層の下で、暗灰黄色シルト（10 層）に埋設された礫作りの暗渠遺構を検出した（図９）。これらは数条の暗渠が合流しながら緩やかに南西から北東へ傾斜しているように観察できる。現状の地形では北東から南西へ地形が下がっていくが、この暗渠が機能していた段階では、上述のように中段面の北半がまだ谷状に窪んでおり、そちらに向けて排水していたものと思われる。

暗渠に用いられている礫の大きさは、20㎝前後より小さなものが多く、一部に 40cm を超えるものが認められるが、本来これらは上層の堆積に帰属するものと考えられる。全体として大きさにばらつきがあり、礫を組むなど規則的に並べているような状況も認められない。明確な掘方が認められないところも多く、溝状に浅く窪めたところに礫を敷いていったものと考えられる。礫と礫の間に灰色粘土が付着していることから、排水装置としての機能は一定程度果たしていたと思われるが、浚渫といった作業が困難なことを考えると、長期的にこの暗渠の機能を維持することは難しかったのではないだろうか。

暗渠が埋め込まれている暗灰黄色シルト中には、櫛目唐津などの陶器が含まれており、近世頃に機能していた遺構であることがわかる。

暗渠の北側には、暗渠と平行して東西方向に伸びる溝状遺構が存在する。検出長 7.7 m、幅 1.5 ～ 2.1 m、深さ 0.6 mであり、埋土は上下２層に分かれるものの（21・22 層）、下層である 22 層の粒径がわずかに大きいことを除くと、その土質に大きな差異はない。この遺構の時期や性格については、埋土からの出土遺物がないため分かりかねるが、一部の暗渠と平行する点を重視するならば、近世の耕作時に設けられた区画溝のような性格が想定できるかもしれない。

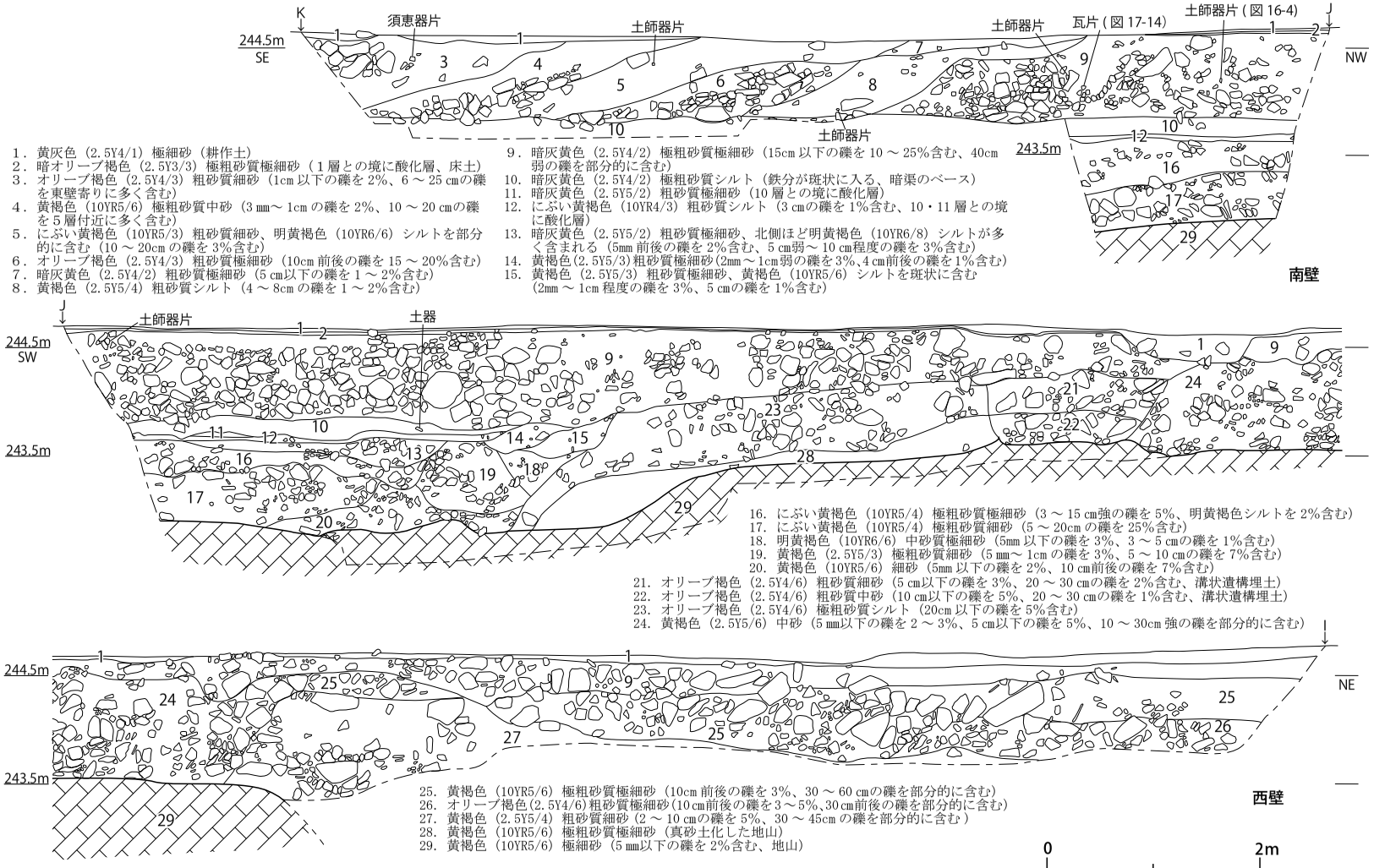


図８　４トレンチ南・西壁土層断面図

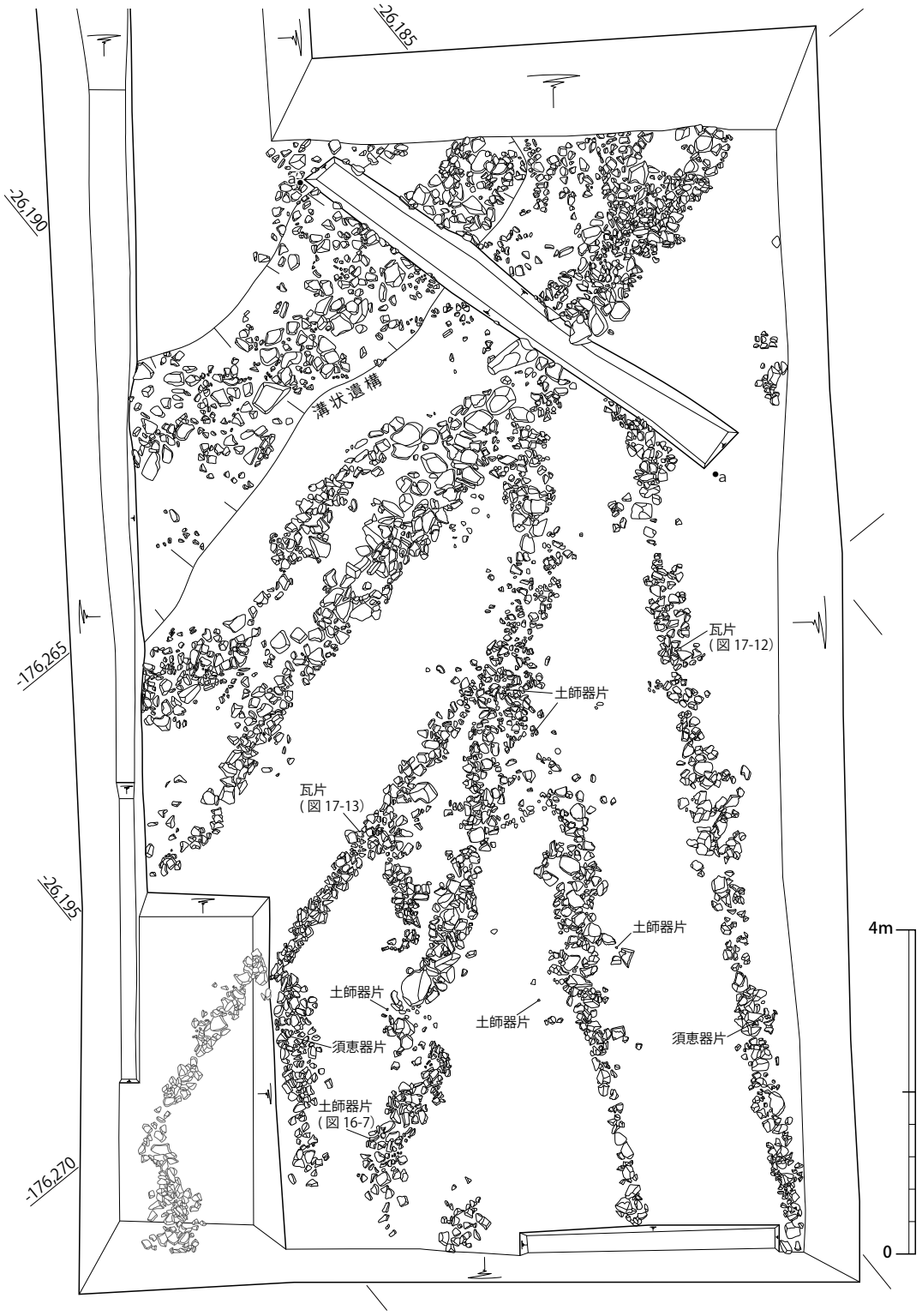


図９　４トレンチ暗渠平面図

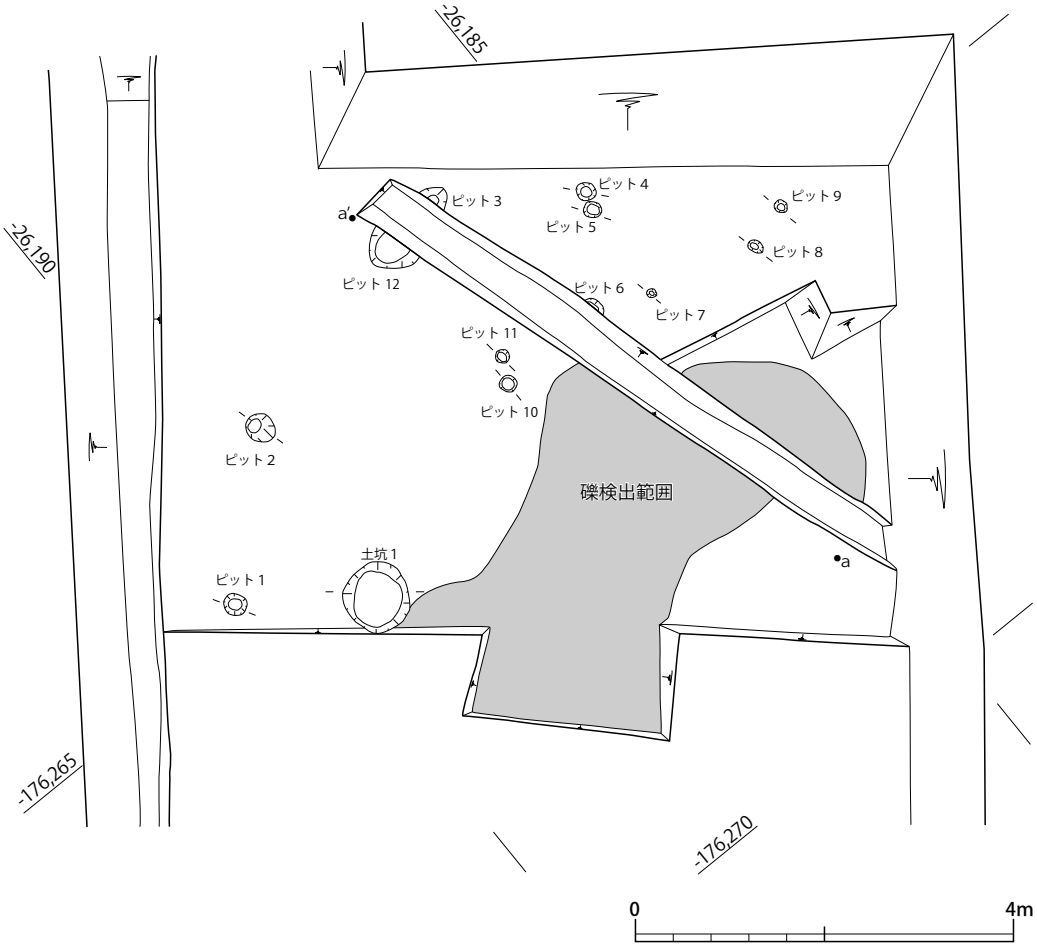
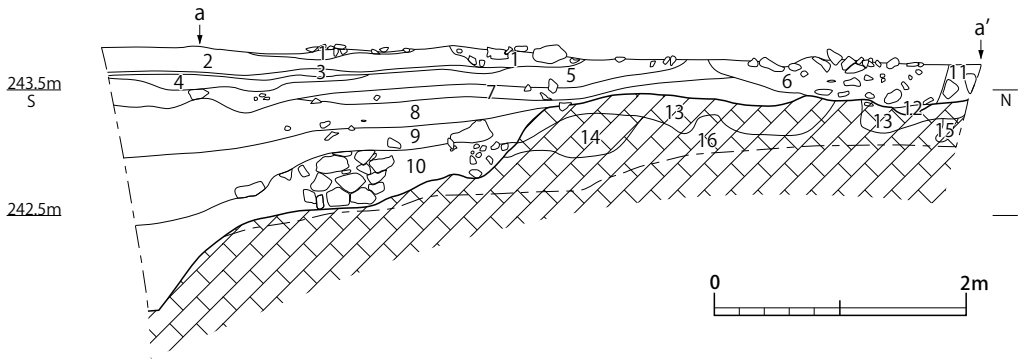


図 10　4 トレンチ下層遺構面平面図

溝状遺構の掘り込み面となっている 23・24 層、および 25 ～ 27 層は、黄褐色系の極細砂を中心とする土層であり、出土遺物が認められず、大礫～巨礫が多く含まれている。他のトレンチで検出されている土層と同様に、土石流による堆積と考えられる。この土層と暗渠のベースとなる 10 層の間にみられる 12 ～ 20 層は、黄褐色系の極細砂を中心とする土層となっている。出土遺物がなく、中礫が多く含まれ、23 ～ 27 層と比べるとやや含まれる礫の大きさが小さい。これらも累積された土石流堆積の可能性が高いといえるが、暗渠を伴う耕作面のための盛土層である可能性もあるかもしれない。

なお、27 層中から大きな花崗岩の礎石が検出された（図版８－６）。長さ 75.6cm、幅 49.6cm、厚み 51.6cm の自然石に、26 × 22cm の方形の柱座が設けられている。法量が非常に大きいため、朝妻廃寺に伴う礎石が流出したものかとも思われたが、柱座が方形であることや、周辺の土層中にも大きな自然礫が混じる状況から、より新しい時代のものと思われる。

暗渠の下層には、１面の遺構面が存在した（図 10）。この遺構面は、北半は地山面を基盤とし、



1．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中砂質シルト
2．暗灰黄色（2.5Y4/2）極粗砂質シルト（鉄分が斑状に入る、西・南壁10層に対応、暗渠のベース）
3．暗灰黄色（2.5Y5/2）粗砂質シルト（3cm前後の礫を1%含む、上層との境に酸化層）
4．にぶい黄色（2.5Y6/4）粗砂質極細砂（地山起源の整地土か）
5．暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト（5mm以下の礫を1%、5cm弱の礫を1%含む）
6．黄褐色（10YR5/6）極粗砂質細砂（10～15cmの礫を25%含む、溝状遺構埋土）
7．黄褐色（2.5Y5/3）シルト、明黄褐色シルトを斑状に含む（1cm以下の礫を2%、5cm弱の礫を1%含む）
8．黄褐色（10YR5/6）シルト（5mm前後の礫を1%、5～10cm強の礫を2%含む、炭片がわずかに混じる）
9．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂（10～15cmの礫を1%含む）
10．黄褐色（10YR5/6）極粗砂質極細砂（西端では10cm未満の礫を、東側では10～25cmの礫を含む）
11．黄褐色（2.5Y5/6）中砂（5mm以下の礫を2～3%、5cm以下の礫を5%、10～30cm強の礫を部分的に含む、西・南壁24層に対応）
12．黄褐色（10YR5/6）中砂（5～10mmの礫を2%含む、ピット12埋土）
13．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂（真砂土化した地山、若干汚れあり）
14．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂（真砂土化した地山、若干汚れあり）
15．明黄褐色（10YR6/8）極細砂（真砂土化した地山）
16．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質シルト（地山）

図 11　4 トレンチ　a－a’ 土層断面図

南半は東に向かって傾斜する地山上の堆積土を基盤としている（図 11 －９層）。土坑１基、ピット 12 基を検出したが、分布にはまとまりが認められない。埋土は、ピット１・４、ピット２・５、ピット８・９・10 において、それぞれ類似する状況があるものの、その性格を明確にするまでには至らなかった。遺構埋土からの出土遺物は、ピット２から土師器の小片が出土しているのみであるが、遺構面の覆土（図 11 －８層）中には瓦器の破片などが含まれていることから、遡っても中世頃ではないかと思われる。

下層遺構面南半のベースとなる土層（図 11 －９層）を掘削すると、南寄りの部分に 40cm 未満の礫が多く検出され、礫溜りの様相を呈していた（図版５－２）。遺構の可能性も考慮して礫の検出作業を行ったが、礫の並びは不揃いで、人為的な構築物と思えるものではなかった。南東側に傾斜する地形に流れ込んだものと考えられる。

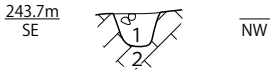
地山については、西壁南端より 6.0 m～ 14.1 mの間に平坦面を形成する部分があり、尾根状の高まりとなっている。その南西側は一段下がって再び平坦面となり、北東側は地山が北東側に向かって下がっていく様子が確認できた。上述の通り、３トレンチの部分にかけて谷地形が存在していたと考えられる。

（５）５トレンチ（図 13 ～ 15）

下段に、北辺 9.0 m、西辺 32.8 m、南辺 10.4 m、中央部が長さ 6.3 m、幅 2.7 mで南東に突出

1．暗灰黄色（2.5Y4/2）極細砂
（3～20cmの礫を50％含む）
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－9層に対応）

土坑１

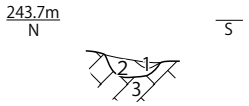


1．２に、オリーブ褐色（2.5Y4/3）
中砂質シルトを30～40％含む
（3cm前後の礫を3％含む）
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

ピット１

1．黄褐色（2.5Y5/4）
中砂質シルト（3～10cmの礫を20％含む）
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

ピット２



1．黄褐色（2.5Y5/3）中砂質極粗砂
2．明黄褐色（10YR6/6）粗砂質極細砂
3．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

ピット３

1．オリーブ褐色（2.5Y4/3）
中砂質シルト
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

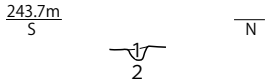
ピット４

1．黄褐色（2.5Y5/3）
中砂質シルト（3～10cmの礫を15％含む）
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

ピット５

1．２に、オリーブ褐色（2.5Y4/3）
粗砂質極細砂を7％含む
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

ピット６

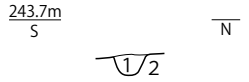


1．２に、黄褐色（2.5Y5/3）
中砂質シルトを10％含む
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－9層に対応）

ピット７

1．２に、暗灰黄色（2.5Y4/2）
中砂質シルトを15％含む
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－9層に対応）

ピット８



1．暗灰黄色（2.5Y5/2）中砂質シルト
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－9層に対応）

ピット９

1．暗灰黄色（2.5Y5/2）中砂質シルト
（5cm前後の礫を7％含む）
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

ピット10

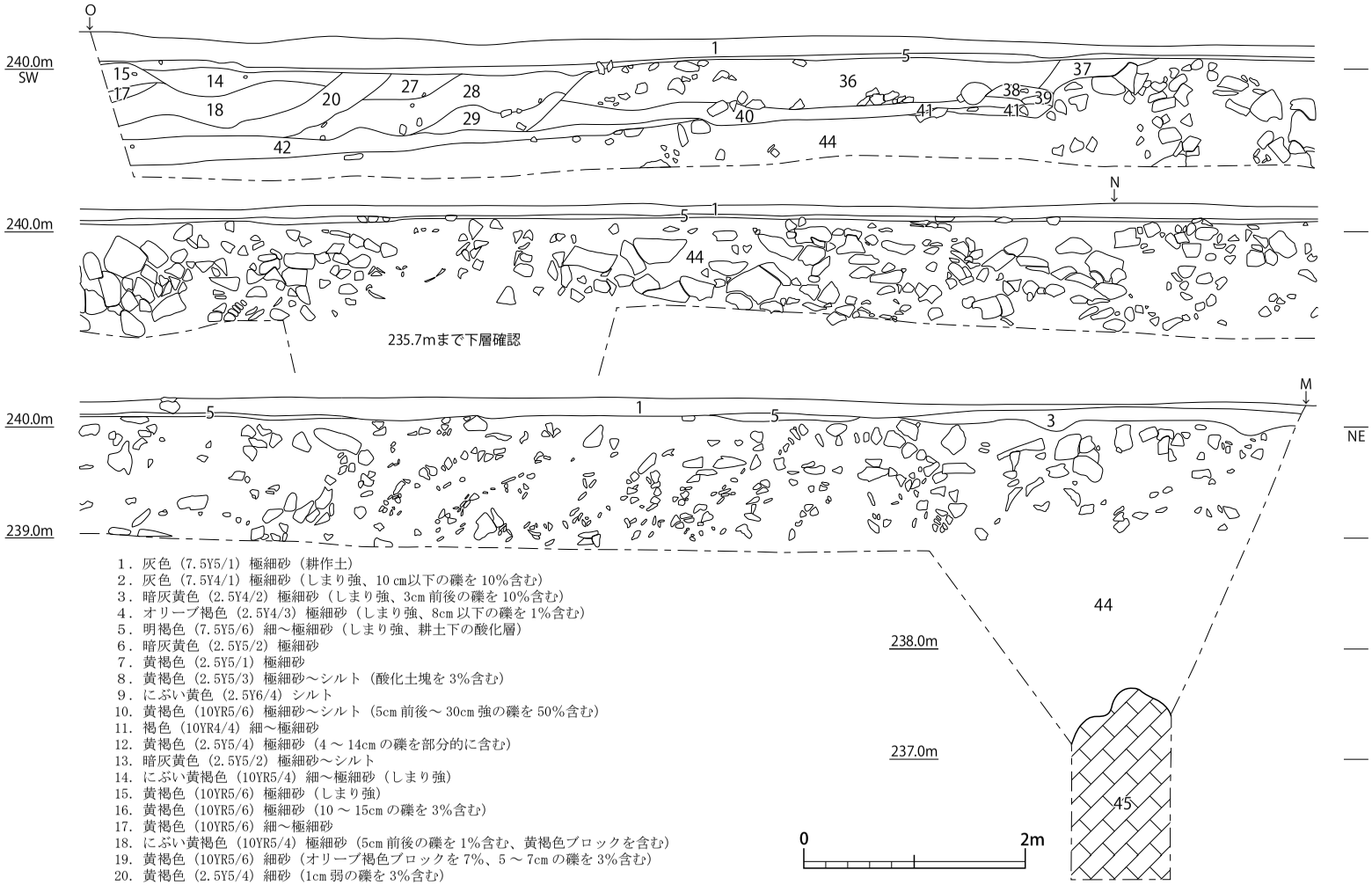
1．黄褐色（2.5Y5/3）シルト
2．明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質極細砂
（図11－13層に対応）

ピット11

	長さ	幅	深さ		長さ	幅	深さ		長さ	幅	深さ
土坑１	70	76	8	ピット５	20	18	17	ピット 10	18	18	13
ピット１	24	22	17	ピット６	25	(8)	19	ピット 11	16	15	7
ピット２	32	30	13	ピット７	10	10	6	ピット 12	56	(34)	7
ピット３	32	(18)	9	ピット８	18	12	6				
ピット４	20	20	23	ピット９	15	13	11				

単位：cm
（　）は残存値

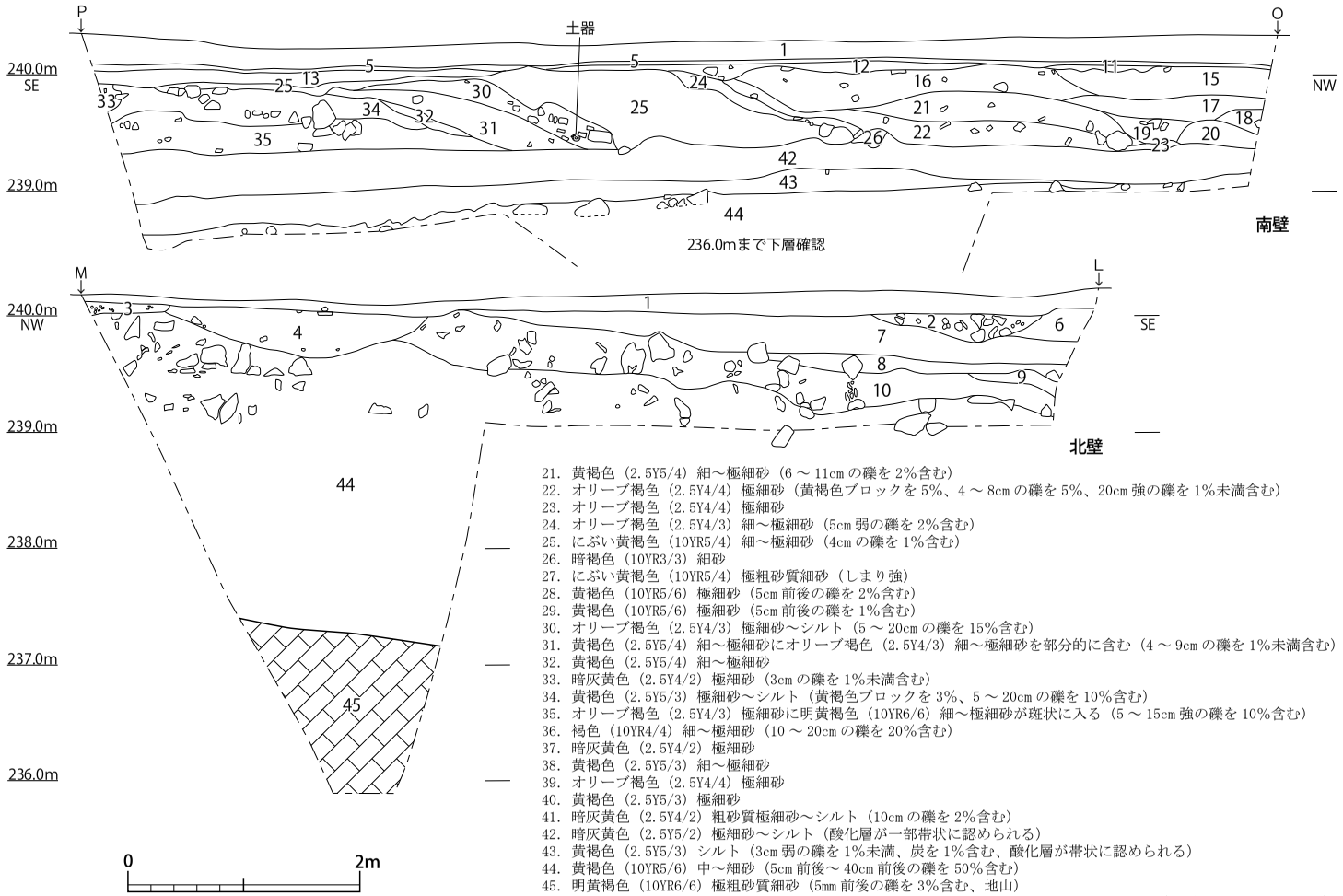
図 12　４トレンチ下層遺構面　遺構土層断面図



1．灰色（7.5Y5/1）極細砂（耕作土）
2．灰色（7.5Y4/1）極細砂（しまり強、10 cm以下の礫を 10%含む）
3．暗灰黄色（2.5Y4/2）極細砂（しまり強、3cm 前後の礫を 10%含む）
4．オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細砂（しまり強、8cm 以下の礫を 1%含む）
5．明褐色（7.5Y5/6）細～極細砂（しまり強、耕土下の酸化層）
6．暗灰黄色（2.5Y5/2）極細砂
7．黄褐色（2.5Y5/1）極細砂
8．黄褐色（2.5Y5/3）極細砂～シルト（酸化土塊を 3%含む）
9．にぶい黄色（2.5Y6/4）シルト
10．黄褐色（10YR5/6）極細砂～シルト（5cm 前後～ 30cm 強の礫を 50%含む）
11．褐色（10YR4/4）細～極細砂
12．黄褐色（2.5Y5/4）極細砂（4 ～ 14cm の礫を部分的に含む）
13．暗灰黄色（2.5Y5/2）極細砂～シルト
14．にぶい黄褐色（10YR5/4）細～極細砂（しまり強）
15．黄褐色（10YR5/6）極細砂（しまり強）
16．黄褐色（10YR5/6）極細砂（10 ～ 15cm の礫を 3%含む）
17．黄褐色（10YR5/6）細～極細砂
18．にぶい黄褐色（10YR5/4）極細砂（5cm 前後の礫を 1%含む、黄褐色ブロックを含む）
19．黄褐色（10YR5/6）細砂（オリーブ褐色ブロックを 7%、5 ～ 7cm の礫を 3%含む）
20．黄褐色（2.5Y5/4）細砂（1cm 弱の礫を 3%含む）

（土層注記は図 14 と共通）

図 13　5 トレンチ西壁土層断面図



21. 黄褐色（2.5Y5/4）細～極細砂（6 ～ 11cm の礫を 2%含む）
22. オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細砂（黄褐色ブロックを 5%、4 ～ 8cm の礫を 5%、20cm 強の礫を 1%未満含む）
23. オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細砂
24. オリーブ褐色（2.5Y4/3）細～極細砂（5cm 弱の礫を 2%含む）
25. にぶい黄褐色（10YR5/4）細～極細砂（4cm の礫を 1%含む）
26. 暗褐色（10YR3/3）細砂
27. にぶい黄褐色（10YR5/4）極粗砂質細砂（しまり強）
28. 黄褐色（10YR5/6）極細砂（5cm 前後の礫を 2%含む）
29. 黄褐色（10YR5/6）極細砂（5cm 前後の礫を 1%含む）
30. オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細砂～シルト（5 ～ 20cm の礫を 15%含む）
31. 黄褐色（2.5Y5/4）細～極細砂にオリーブ褐色（2.5Y4/3）細～極細砂を部分的に含む（4 ～ 9cm の礫を 1%未満含む）
32. 黄褐色（2.5Y5/4）細～極細砂
33. 暗灰黄色（2.5Y4/2）極細砂（3cm の礫を 1%未満含む）
34. 黄褐色（2.5Y5/3）極細砂～シルト（黄褐色ブロックを 3%、5 ～ 20cm の礫を 10%含む）
35. オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細砂に明黄褐色（10YR6/6）細～極細砂が斑状に入る（5 ～ 15cm 強の礫を 10%含む）
36. 褐色（10YR4/4）細～極細砂（10 ～ 20cm の礫を 20%含む）
37. 暗灰黄色（2.5Y4/2）極細砂
38. 黄褐色（2.5Y5/3）細～極細砂
39. オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細砂
40. 黄褐色（2.5Y5/3）極細砂
41. 暗灰黄色（2.5Y4/2）粗砂質極細砂～シルト（10cm の礫を 2%含む）
42. 暗灰黄色（2.5Y5/2）極細砂～シルト（酸化層が一部帯状に認められる）
43. 黄褐色（2.5Y5/3）シルト（3cm 弱の礫を 1%未満、炭を 1%含む、酸化層が帯状に認められる）
44. 黄褐色（10YR5/6）中～細砂（5cm 前後～ 40cm 前後の礫を 50%含む）
45. 明黄褐色（10YR6/6）極粗砂質細砂（5mm 前後の礫を 3%含む、地山）

（土層注記は図 13 と共通）

図 14　5トレンチ南・北壁土層断面図

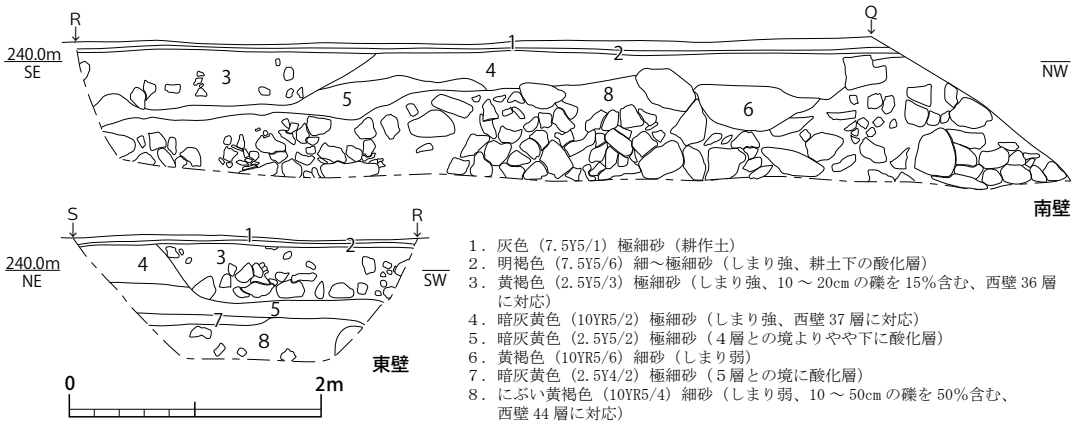


図 15　5 トレンチ中央部南・東壁土層断面図

したＥ字形のトレンチを設定した。

掘削の結果、南側３分の１については、明確な遺構は確認できなかったものの、標高約 239.7 m（40 層上面）、約 239.4 m（42 層上面）、約 239.1 m（43 層上面）で平坦な耕作面と思われる面を確認した。下層耕作面の基盤層にはあまり遺物が含まれておらず、時期についてはよくわからない。中層耕作面の基盤層には、多くの瓦器片に混じって近世と思われる陶磁器片もわずかに出土していることから、上・中層は近世頃、下層も近世を中心に遡っても中世までの耕作面と考えられる。つまり、５トレンチを設定した下段面も、近世までは南側が一段低い棚田状を呈していたと考えられる。

11 ～ 39 層の土層は、細かく分かれていた棚田を集約し、１つの大きな耕作面を形成するために、近世から近代にかけて行われた段階的な盛土層と考えられる。盛土の順序としては、まず 36 ～ 39 層を盛る段階があり、続いて現在の下段面南端側から盛土を行い、外側の輪郭を定めてから、その内側に土砂を充填していったようである。

トレンチ中央部で確認した３・４層は（図 15）、36・37 層に対応する盛土層であり、トレンチ北端で検出した６～ 10 層についても、同様の盛土層と考えられよう。

上述した盛土層、耕作土層の下層からは、分厚い土石流堆積が確認できた（44 層）。トレンチの北側３分の２では、現耕作土・床土層の直下から当該土層が検出されている。この堆積からの遺物の出土は皆無で、非常に厚く堆積していることが想定されたため、トレンチ全体の掘削は、概ね地表下 1.3 mまでに留め、この中～巨礫を非常に多く含む土層がどの程度の厚さで堆積しているのかを確認するため、トレンチ内の３カ所で、下層確認を行うこととした。北端部では標高約 235.9 mの高さで地山が検出され、44 層の厚みは約 2.4 mであった。中央部では、標高約 235.7 mの高さでも地山が検出されなかったが、その高さで湧水が認められたため、地山にほど近い高さと思われる。南端部では、標高約 236.0 mの高さまで掘削を行ったが地山は検出されず、湧水も認めら

れなかった。南側のトレンチ外は、伏見川に向けて急な崖となっており、地山もそれに対応する深さにあると考えられる。

第５章　遺物

今次調査では、上段の１・２トレンチでは出土遺物がなく、３トレンチで 26 点、４トレンチで 523 点、５トレンチで 157 点の出土遺物があった。それらの多くは土師器等の小片や現代遺物であり、器種同定すら難しいものが大半を占める。その中で、ある程度形態が判明する資料 20 点について実測図を作成した。以下に、それらの特徴について詳述する。

（１）土器（図 16）

１～３は、３トレンチで出土した須恵器の破片で、いずれも現耕作土直下の土層からの出土である。１・２は、杯蓋の破片で、いずれも口縁部と天井部の境に明瞭な段はなく、弱い凹線によって区別される。口縁端部も丸くおさめる点で共通するが、復元口径は、１が 14.6cm、２が 12.4cm で、２の方がやや小さい。３は、甕の体部下半で、残存高 9.5cm、厚み 0.55 ～ 0.9cm である。外面は

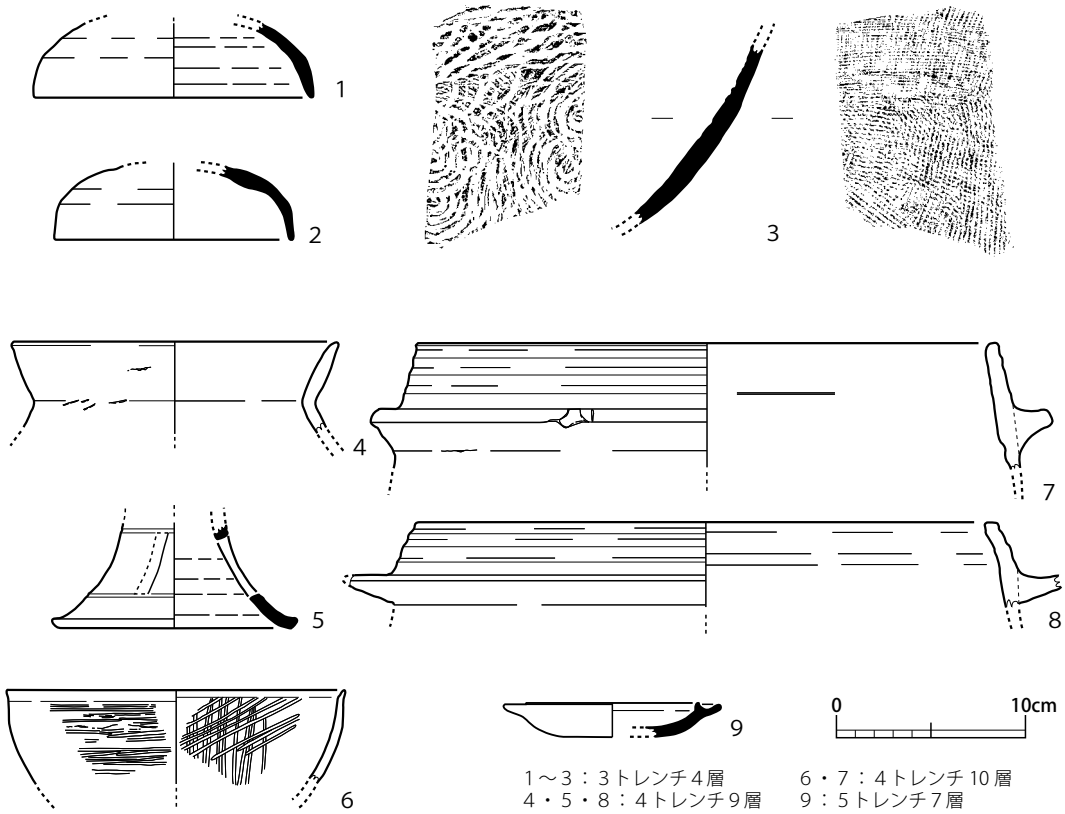


図 16　３・４・５トレンチ出土土器実測図

平行タタキの後に上半のみカキメが施され、内面には同心円の当て具痕が残る。

４～８は、いずれも４トレンチの近世暗渠以降の堆積層から出土したものである。４は、土師器甕の口縁部～頸部の破片で、口径 17.0cm、残存高 4.9cm である。口縁部は厚ぼったく、端部は丸くおさめられる。頸部外面にタタキの痕跡が残っている。５は、須恵器高杯の脚部片で、脚裾部径 12.9cm、残存高 5.6cm である。外面の上下に２条の浅い沈線がめぐり、その間に３方の方形スカシ孔を設ける。口縁端部はやや外側に引き出すのみで、特別な造作は行われていない。６は、土師器杯の口縁部～体部片で、口径 17.8cm、残存高 5.0cm である。口縁端部は外側に屈曲し、内面に明瞭な稜線をもつ。内外面にはナデの後にミガキが施され、外面は横方向、内面は縦方向の後に右上がり斜め方向のミガキである。７・８は土師器羽釜の口縁部～鍔部の破片である。口径はともに 30.7cm に復元でき、口縁部はやや内側にはいるものの直口状を呈している。口縁部外面にはナデによる凹凸が明瞭に認められ、８は端部を平らに整えている。鍔端部は、７が方形に、８はやや丸みをもって仕上げられるが、７には一部に棒状の工具が当たったような痕跡が認められる。７の内面には１条の浅い沈線が巡っており、製作時の何らかの痕跡と思われる。

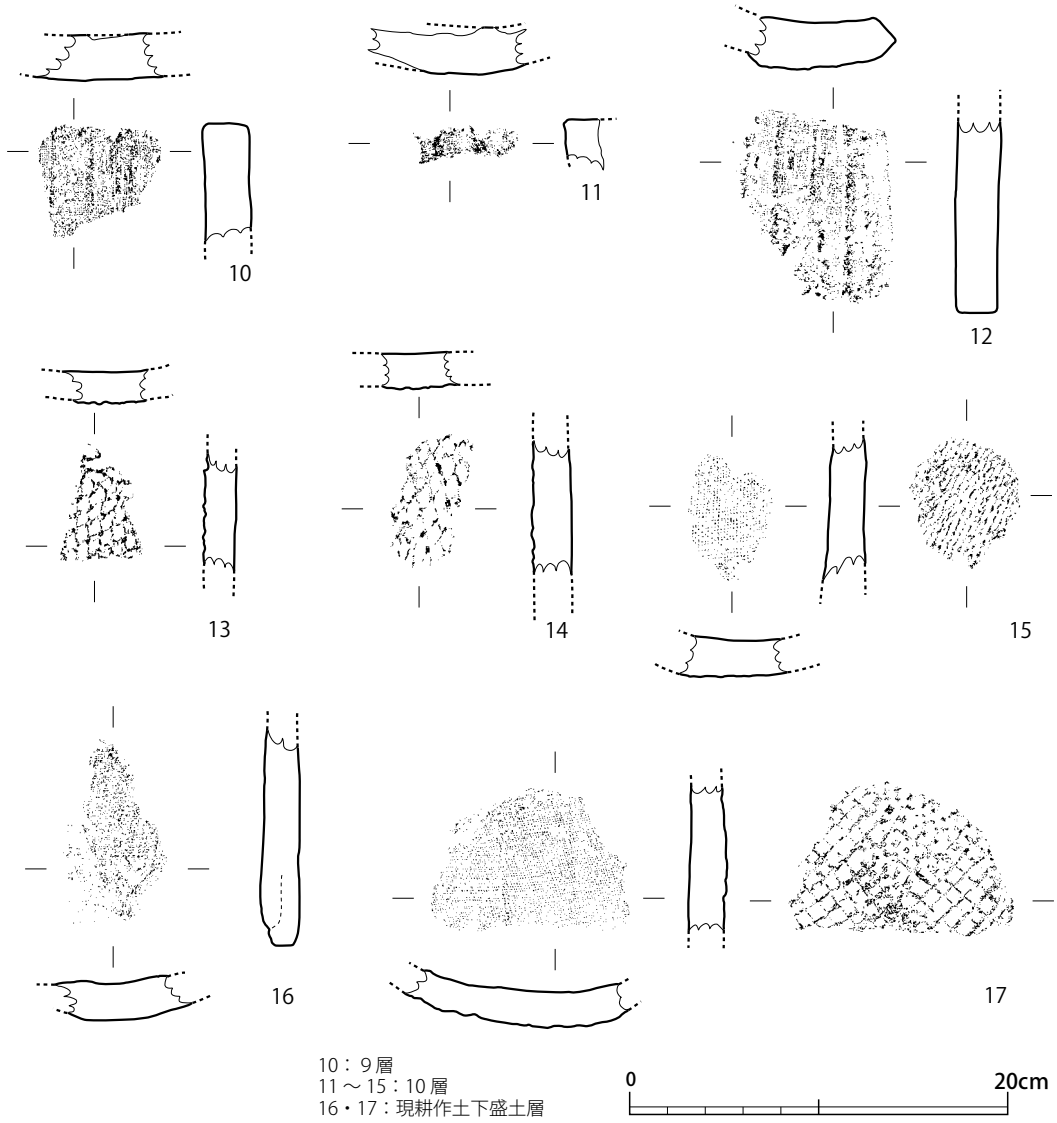
９は、５トレンチから出土した須恵器杯身であるが、蓋である可能性も考えられる。口径は 9.0cm であり、口縁部は端部が受け部からわずかに突き出る程度に退化している。底部内面には、回転ナデの後に施された静止ナデが確認できる。

（２）瓦（図 17・18）

今次調査で出土した瓦は、近現代のものを除くと全て４トレンチから出土した小片のみで、その全形がわかるものはない。ただし、朝妻廃寺における主要な瓦については、今までの調査で概ね明らかになっているため（前園ほか 1978）、それに当てはめるような形で述べていくこととする。

10 ～ 12 は、平瓦Ⅰと分類された凸面布目平瓦である。凸面に幅２cm 程度の枠板の跡や布目が明瞭に確認でき、最も残りの良い 12 では、布を桶に固定するための留め具痕跡が、7 × 3mm の突出として確認できる。凹面はいずれも磨耗のため明瞭ではないが、ケズリと思われる痕跡が認められる。上下の別はつかないが、端辺はケズリによると思われ、側辺は二面落としの三角状を呈している。色調は、にぶい橙色を中心に一部灰白色を呈する。

13･14･17 は、平瓦Ⅱと分類された、凸面に格子タタキの痕跡を明瞭に残す資料である。ただし、平瓦Ⅱとされる資料は、内面に布目や枠板の圧痕を残すとされているが、今次調査の資料で凹面に布目を残すのは 17 のみであり、13･14 はともに凹面に横方向のケズリが施されている点で異なっている。またタタキの格子形状や色調にも違いがあり、13・14 は格子が斜格子を呈し、灰白色であるのに対し、17 は格子が方形になり、灰色となる。17 についても、１次調査で示されている平瓦Ⅱの資料が斜格子であるため、厳密には平瓦Ⅱと同じ分類に入れられるかは定かではない。今後、過去の調査資料も含めた平瓦の細分が必要であろう。



15 は、平瓦Ⅲと分類された、凸面に縄タタキの痕跡を残す資料である。凹面には布目の圧痕が明瞭に確認でき、色調は灰白色である。

18・19 は、実測図の下側に向かって徐々に厚みを増していくことから、軒平瓦の破片と判断した資料である。瓦当面が残存しないため、分類に当てはめることはできないが、凸面は 18 がナデ調整で、19 はケズリ後にナデ調整を行っているようである。凹面は、ともに布目圧痕が確認できるが、19 には布目を消すようなナデ調整が一部に確認できる。色調は、18 が浅黄色で、19 がにぶい黄橙色である。凸面にナデが施される点を重視すれば、16 も軒平瓦になる可能性がある。

20 は、他の資料に比べてやや器壁の薄い資料であり、他の資料が概ね厚さ 1.7 ～ 2.5cm である

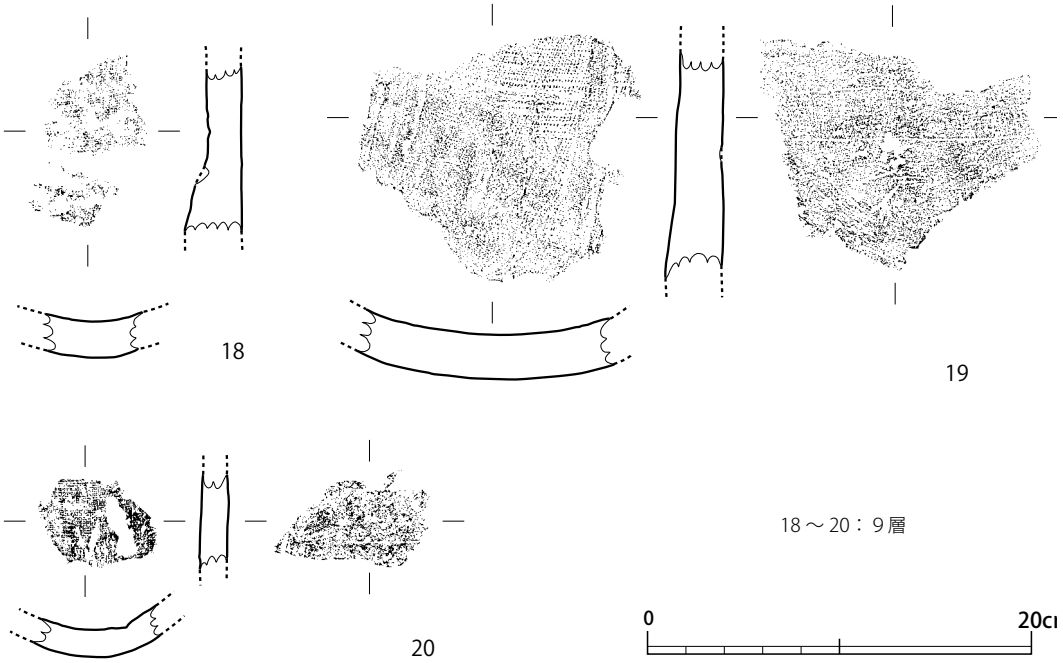


図 18　４トレンチ出土瓦実測図２

のに対し、本資料は 1.4cm である。凸面はケズリの後にナデが施されたようで、凹面には布目圧痕がよく残っている。色調は灰白色を呈する。屈曲がやや強いことを踏まえると、丸瓦系の資料と考えられるが、小片であるため判然としない。

第６章　まとめ

今回の発掘調査では、市道建設予定地に計５つのトレンチを設定して調査を行った。

その結果、１～３トレンチでは、明確な遺構は検出されず、分厚い時期不詳の土石流堆積を確認したのみであった。

４トレンチでは、近世の耕作に伴う暗渠と、その下層において遺構面を１面確認したが、後者についてはその時期や性格を明らかにするには至らなかった。近世の暗渠は、人頭大から拳大程度の大きさの礫を用いたもので、明確な掘方をもたず、礫も乱雑に並べる程度の簡素なものであった。今次調査で検出した堆積土だけをみても、人頭大から拳大の礫は非常に多く含まれており、周辺で容易に採取可能な礫が用いられたのであろう。本トレンチにおいても土石流堆積と思われる土層が多く認められた。それぞれの生じた時期は不明確であるが、当地ではこの土石流堆積で形成された地形を改変しながら、近世を中心に耕作地の拡充が行われてきたと評価できよう。

５トレンチにおいても、明確な遺構は伴わなかったが、南側３分の１の範囲で近世頃の耕作面を検出した。この耕作面の下層には、数mに及ぶ分厚い土石流堆積が確認でき、遺物等が皆無である

ことから、非常に古い段階の土石流であると考えられる。上述のような耕作地の拡充は、５トレンチにおいても確認することができた。

今回の調査では、古代寺院である朝妻廃寺に伴う遺構は全く確認できず、近世以降の堆積土から古代に遡る布目瓦が若干数出土した程度であった。廃寺の中心地点は１・２次調査地のあたりであり、これら出土瓦をもって今次調査地のあたりまで寺域の広がりを想定し、それが後に大きく削平されて残存しなかった可能性も排除はできないものの、そういった状況を想定するには余りにも廃寺に関わる遺物が少ないように思われる。そのため、今次調査地については、寺域の広がりを想定せず、古代の段階においても大きくは南に向かって傾斜する谷地形をなし、寺域の南限を画していたと考えられるのではないだろうか。

朝妻廃寺は、古くからその存在が認識されているものの、発掘調査によって得られている知見はそれほど多くない。今次調査でもその実態を直接的に明らかにする成果は得られなかった。しかし、金剛・葛城山麓の古代寺院が、日本の寺院史を考える上で大きな比重を占めていることを踏まえると、今回の調査成果が果たす役割も、決して小さく見積もることはできないだろう。

参考文献

秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十八冊　奈良県教育委員会
網干善教 1959「御所市大字室　みやす古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十二輯　奈良県教育委員会
網干善教 1961a「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第四集　奈良県教育委員会
網干善教 1961b「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺古墳」及び「水泥塚穴古墳」の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十四輯　奈良県教育委員会
梅原末治 1922「大和御所附近の遺蹟研究」『歴史地理』第参拾九卷　第四號　日本歴史地理學會
近江俊秀編 1993『鴨神遺跡－第２次～第４次調査－』奈良県文化財調査報告書第 66 集　奈良県立橿原考古学研究所
岡田憲一 2011「秋津遺跡第４次調査」『奈良県遺跡調査概報　2010 年度』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
岡田憲一・絹畠歩・中東洋行 2013「秋津遺跡第６次調査」『奈良県遺跡調査概報　2012 年度』第一分冊　奈良県立橿原考古学研究所
岡田憲一・木村理恵 2015「秋津遺跡第７－３次調査」『奈良県遺跡調査概報　2014 年度』第一分冊　奈良県立橿原考古学研究所
岡田憲一・中野咲 2015「秋津遺跡第７－１次・７－２次調査」『奈良県遺跡調査概報　2013 年度』第２分冊　奈良県立橿原考古学研究所
岡田憲一・松岡淳平 2012「秋津遺跡第５次調査」『奈良県遺跡調査概報　2011 年』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
岡田雅彦編 2013『観音寺本馬遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 113 冊　奈良県立橿原考古学研究所
金澤雄太 2015「條ウル神古墳」『大和を掘る 33 － 2014 年度発掘調査速報展－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
河上邦彦 2001「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史－村川行弘先生頌寿記念論集－』大阪経済法科大学出版部
河上邦彦・亀田博・千賀久編 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 31 冊　奈良県教育委員会
河上邦彦・木下亘編 2004『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 87 冊　奈良県教育委員会
北中恭裕編 2007『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書第 122 集　奈良県立橿原考古学研究所
絹畠　歩 2015「秋津遺跡第８次調査」『奈良県遺跡調査概報　2013 年度』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
木許　守編 1992『鴨都波　11 次　発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第 11 集　御所市教育委員会
木許　守編 1996『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市文化財調査報告書第 20 集　御所市教育委員会
木許　守編 2007『巨勢山古墳群Ⅵ』御所市文化財調査報告書第 30 集　御所市教育委員会
木許守・西村慈子編 2015『観音寺本馬遺跡』御所市文化財調査報告書第 48 集　御所市教育委員会
木許守・小泉翔太・村島有紀編 2017『玉手遺跡』御所市文化財調査報告書第 52 集　御所市教育委員会
楠元哲夫編 1978「御所市掖上鑵子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977 年度』奈良県立橿原考古学研究所
御所市教育委員会 1989『ゴルフ場開発事業に伴う　第１回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』

御所市教育委員会 1990『ゴルフ場開発事業に伴う　第２回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
御所市教育委員会編 2003『古代葛城とヤマト政権』学生社
阪本晋通編 2002『鴨都波 16 次発掘調査報告－附．平成 12・13 年度　個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査－』御所市文化財調査報告書第 27 集　御所市教育委員会
佐々木健太郎 2012『名柄遺跡　第６次　発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第 41 集　御所市教育委員会
佐々木好直編 1999『南郷遺跡群Ⅱ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 73 冊　奈良県教育委員会
佐藤小吉 1916「權現堂古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回　奈良縣
島本　一 1938「琴柱形石製品の新例」『考古學雑誌』第二十八卷　第六號　考古學會
十文字健編 2007『ドンド垣内古墳群』奈良県文化財調査報告書第 119 集　奈良県立橿原考古学研究所
白石太一郎 1974「御所市石川古墳群」『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会
末永雅雄 1932「南葛城郡葛城村西北窪　和田山古墳」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』第二輯　奈良縣
鈴木一議編 2014『観音寺本馬遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 114 冊　奈良県立橿原考古学研究所
関川尚功 1989「室大墓古墳外堤部発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第２分冊　奈良県立橿原考古学研究所
高橋健自 1919「南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回　奈良縣
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
豊岡卓之 1989「鴨都波遺跡第７次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第１分冊　奈良県立橿原考古学研究所
奈良県教育委員会 1980「新宮山古墳」『奈良県指定文化財－昭和 54 年度版－』
坂　靖編 1996『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 69 冊　奈良県教育委員会
坂　靖編 2000『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 76 冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信 2002「北窪遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2001 年度』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信 2006「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報　2005 年』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信・十文字健 2005「北窪遺跡 2004 －第１次調査　伏見遺跡 2004 －第１・２次調査」『奈良県遺跡調査概報　2004 年』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
藤田和尊 1987「御所市・小林遺跡の調査」『季刊明日香風』第 23 号　財団法人飛鳥保存財団
藤田和尊 1991「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42（1989 年度版）　日本考古学協会
藤田和尊編 1985『巨勢山境谷 10 号墳発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第４集　御所市教育委員会
藤田和尊編 1987『巨勢山古墳群Ⅱ－御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査１－』御所市文化財調査報告書第６集　御所市企画課
藤田和尊編 1994『楢原遺跡Ⅰ』御所市文化財調査報告書第 17 集　御所市教育委員会
藤田和尊編 2002『巨勢山古墳群Ⅲ』御所市文化財調査報告書第 25 集　御所市教育委員会
藤田和尊・尼子奈美枝編 1992『鴨都波　12 次　概報』御所市文化財調査報告書第 12 集　御所市教育委員会
藤田和尊・木許守編 1999『台風７号被害による室宮山古墳出土遺物』御所市文化財調査報告書第 24 集　御所市教育委員会
藤田和尊・木許守編 2001『鴨都波１号墳　調査概報』学生社
前園実知雄・関川尚功・中井公 1978「御所市朝妻廃寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977 年度』奈良県教育委員会
前園実知雄 1981「御所市朝妻廃寺発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報　1979 年度』奈良県教育委員会
松岡淳平 2011「中西遺跡第 16 次調査」『奈良県遺跡調査概報　2010 年度』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
松田真一 1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
松田真一・近江俊秀・清水昭博 1993「御所市高宮廃寺について」『青陵』第 83 号　奈良県立橿原考古学研究所
本村充保 2009「観音寺本馬遺跡－京奈和自動車道（観音寺Ⅰ区）－」『奈良県遺跡調査概報　2008 年』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所
本村充保・中野咲 2013「中西遺跡第 18 次調査」『奈良県遺跡調査概報　2012 年度』第一分冊　奈良県立橿原考古学研究所
米川仁一・菊井佳弥 2010「秋津遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2009 年度』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所

図　版

1　1トレンチ全景（西から）

2　2トレンチ掘削前（北東から）

3　同全景1（東から）

4　同全景2（南東から）

5　同下層確認（南から）

図版2

1　3トレンチ全景（南から）

2　同近景（南から）

3　4トレンチ掘削前
（北東から）

1　4トレンチ全景1（北東から）

2　同全景2（北東から）

1　4トレンチ全景３（東から）

2　同全景４（南から）

1　4トレンチ下層遺構面全景（東から）

2　同下層礫溜り（東から）

図版6

1　4トレンチ南壁土層断面

2　同西壁土層断面（南西側）

3　同西壁土層断面（中央）

4　同西壁土層断面（北東側）

1　4トレンチ土坑1（北東から）

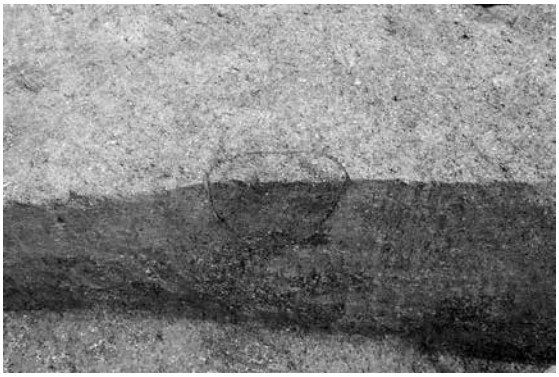
2　同ピット1（北東から）

3　同ピット2（東から）

4　同ピット3（西から）

5　同ピット4（南西から）

6　同ピット5（北東から）

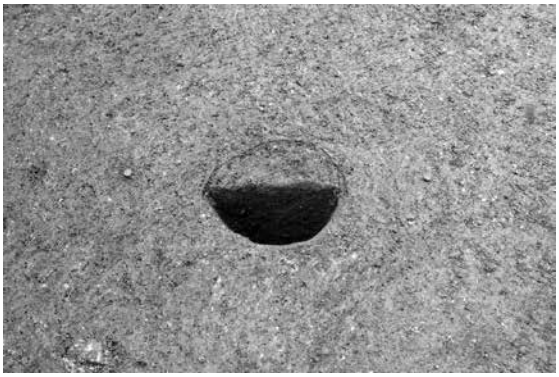


7　同ピット6（西から）

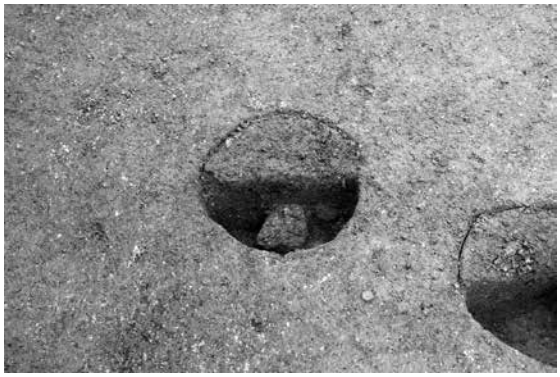
8　同ピット7（東から）

図版8

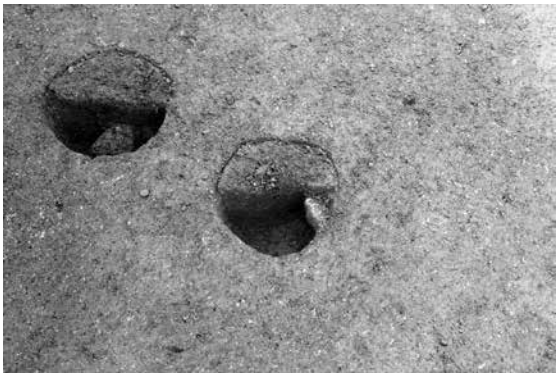
1　4トレンチピット8（東から）



2　同ピット9（東から）



3　同ピット10（東から）



4　同ピット11（東から）

5　同ピット12（東から）

6　4トレンチ出土礎石

1　５トレンチ掘削前
（北東から）

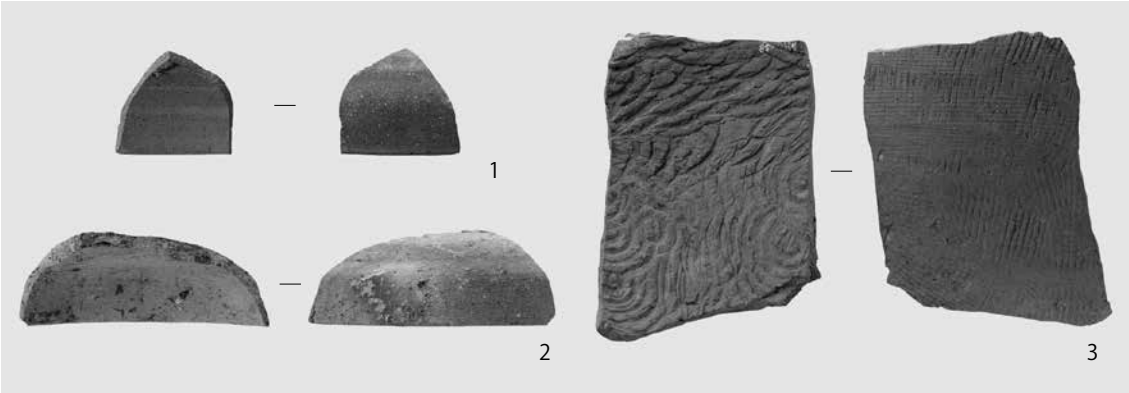
2　同全景 (北東から)

3　同南壁土層断面

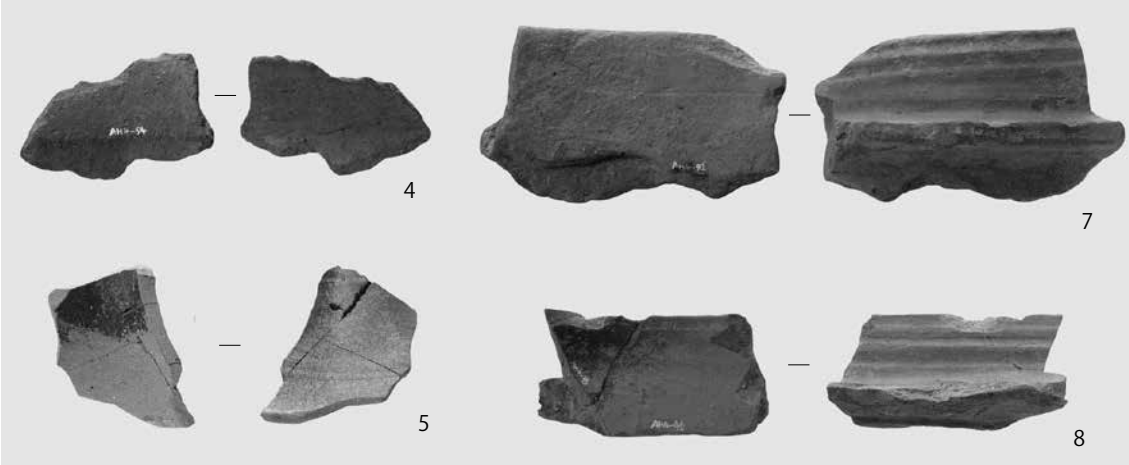
1　５トレンチ中央部
南壁土層断面

2　同北端下層確認
（南西から）

3　同南端下層確認
（北から）



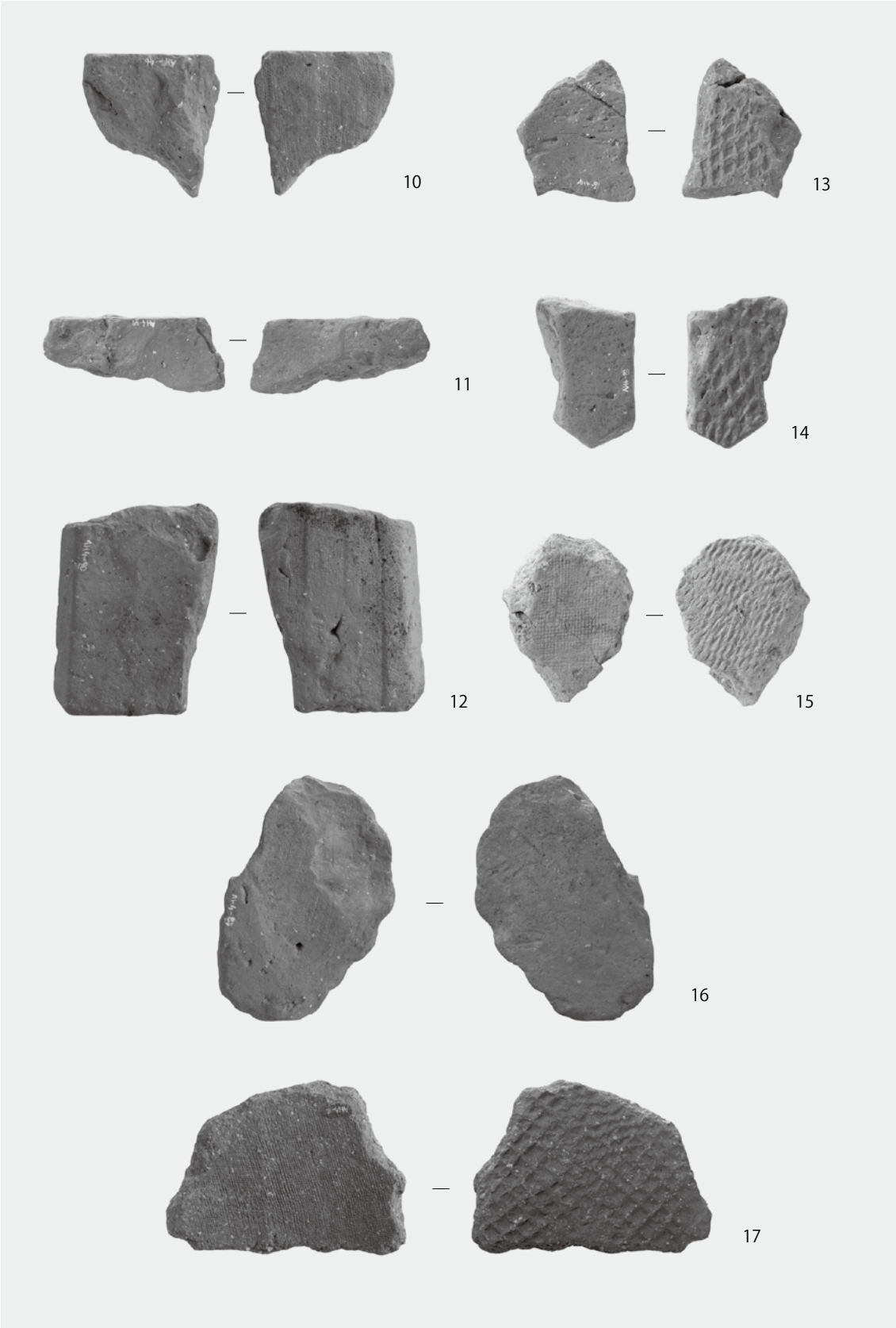
1　3トレンチ出土土器



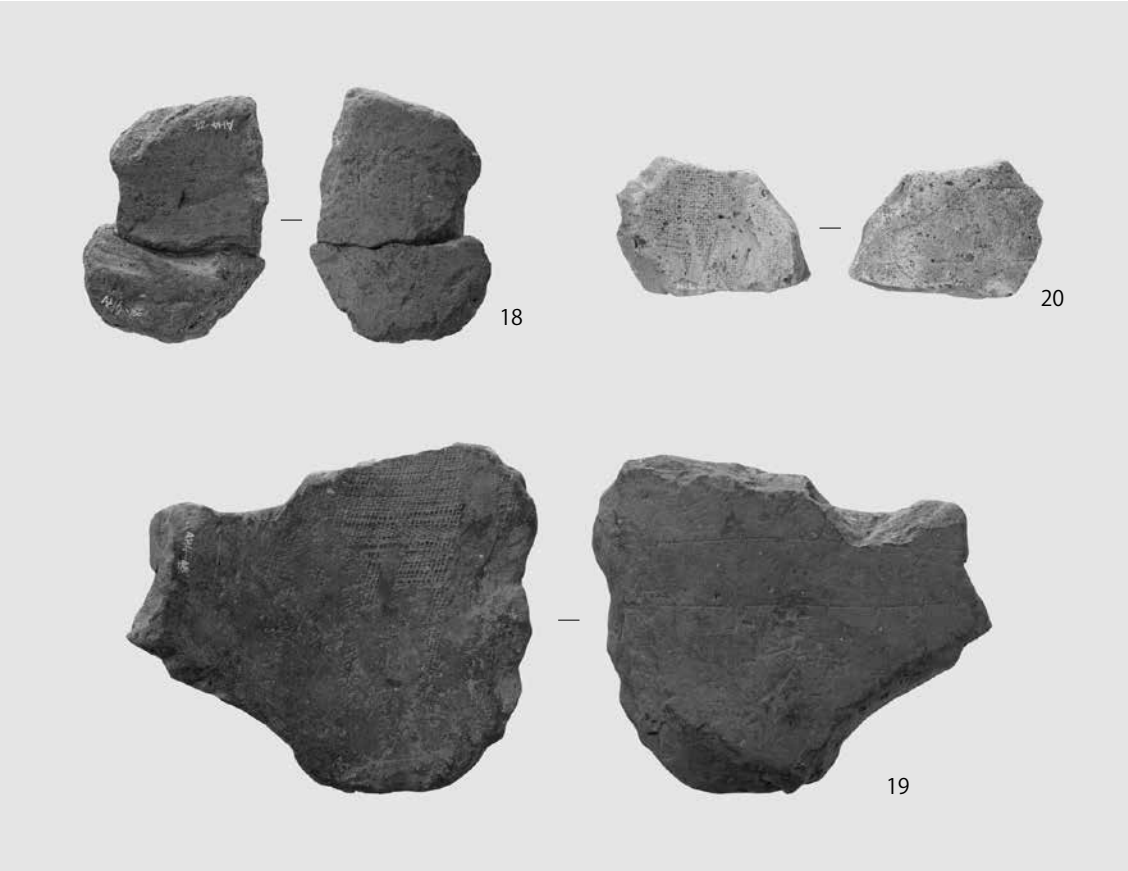
2　4トレンチ出土土器

3　5トレンチ出土土器

図版12



4トレンチ出土瓦1



4トレンチ出土瓦２

報告書抄録

ふりがな	あさづまはいじ
書　　名	朝妻廃寺
副　書　名	第４次発掘調査報告
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 53 集
編著者名	金澤雄太
編集機関	御所市教育委員会
所　在　地	〒 639-2277　奈良県御所市室 102 番地　　TEL 0745-60-1608
発行年月日	2017 年３月７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
朝妻廃寺（あさづまはいじ）	御所市（ごせし） 大字朝妻（あさづま）	29208	16 － D － 28	34° 24′ 50″	135° 42′ 45″	20160801 ～ 20161028	411	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
朝妻廃寺	社寺	飛鳥 奈良 鎌倉 室町	暗渠・土坑・ピット		須恵器・土師器・陶磁器・瓦		中心伽藍の南隣接地を調査。寺院に伴う遺構は検出されず、近世の耕作に伴う暗渠等が検出された。	

奈良県御所市

朝　妻　廃　寺

－第４次発掘調査報告－

御所市文化財調査報告書　第 53 集

平成 29 年（2017 年）３月７日

編集・発行　御所市教育委員会

御所市室 102 番地

印　　刷　株式会社　笹田印刷所

御所市今住 16 － 3